

栗東町埋蔵文化財調査

1992年度 年報Ⅱ

— 岩畑遺跡・狐塚古墳群・山田窯跡 —



狐塚2号墳出土埴輪

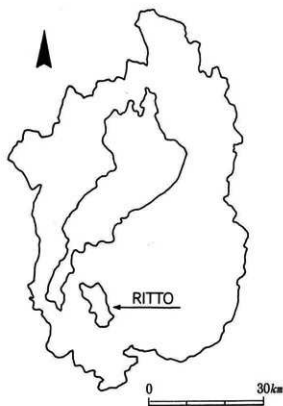
1994

財団法人 栗東町文化体育振興事業団

栗東町埋藏文化財調査

1992年度 年報 II

— 岩畑遺跡・狐塚古墳群・山田窯跡 —



1994

財団法人 栗東町文化体育振興事業団

例 言

1. 本書は財団法人栗東町文化体育振興事業団が1992年度に実施した岩畑遺跡発掘調査の報告、および1991年度に実施した狐塚古墳群・山田窯跡の調査成果報告である。
2. 本書の刊行は1991年度、1992年度の『年報』を補足するものである。
3. 本書の執筆は第1章を近藤広、第2章を雨森智美、第3章を佐伯英樹、第2章付論は橋本奈保子、第3章2-(2)を清水好洋が行った。全体の編集は佐伯英樹が行った。
4. 調査体制は以下のとおりである。

岩 畑 遺 跡	狐 塚 古 墳 群	山 田 窯 跡
財団法人栗東町文化体育振興事業団	財団法人栗東町文化体育振興事業団	栗東町教育委員会
理 事 長 武 邑 尚 邦	理 事 長 武 邑 尚 邦	教 育 長 水 野 清
常務理事 渋谷 一夫	常務理事 田中 利一	教育次長 鎌田 善隆
事務局長 中井みさゑ	事務局長 仙石 龍岳	社会教育課長 中井みさゑ
埋蔵文化財発掘調査課調査係長 平井 寿一	調査係長 平井 寿一	係 長 原 田 上
調査担当技師 近藤 広	調査担当技師 雨森 智美	主任技師 清水 好洋
		調査担当技師 佐伯英樹 (文庫より派遣)

5. 現地調査および報告書作成にあたり、以下の方々に御指示・御協力を得た。(敬称略)
 - 〈岩畑遺跡〉石野博信、亀田修一、杉浦隆支、宮崎幹也、山本高照
 - 〈狐塚遺跡〉小笠原好彦、肥塚隆保、小宮猛之、山本一博
 - 〈山田窯跡〉兼康保明、櫻井信也、杉本宏、増田孝彦、丸山竜平
6. 現地調査および整理事業では以下の方々に御協力を得た。
 - 〈岩畑遺跡〉上田和江、大岡道代、奥村美枝子、教野妙子、辻井一二美、牧野富子、宮嶋八重美、横山こと
 - 〈狐塚遺跡〉井上妙子、井原ちえみ(滋賀大学)、今村梅子、奥村美枝子、木下政子、久徳良子、竹村ヒロ子、西村寮子、西前悠、佐藤陽子(奈良大学)、栗東アスレチッククラブ
 - 〈山田窯跡〉石原恵子、大田正之助、川崎うた、国松好子、西岡たよ子、平松しず子、山元祐人(大谷大学)、渡部典子
7. 遺構・遺物写真撮影にあたっては、松村浩(栗東歴史民俗博物館)の御協力を得た。遺物復元・実測にあたっては、畑本陽子(同館調査員)、田中たまき(同館整理員・京都精華大学)、大橋美和子(調査員)、奥村美枝子、宮嶋八重美、木村三津子(整理員)の御協力を得た。
8. 遺構の略号を使用する場合は、奈良国立文化研究所の方式による略号を使用した。
9. 図面に使用した方位は特に明記しないかぎり全て磁北である。
10. 本書で使用した標高はT P(東京湾平均海面高度)である。

目 次

例 言

目 次

第1章 岩 畑 遺 跡

1. 位置と環境	1
2. 調査の経緯	4
3. 調査の概要	5
4. 考 察	19
5. 小 結	24
図 版 1～14	39～52

第2章 狐 塚 古 墳 群

1. 位置と環境	53
2. 調査の経緯	54
3. 調査の概要	56
4. 小 結	71
図 版 1～6	75～80
付 論	81

第3章 山 田 窯 跡

1. 位置と環境	85
2. 調査の経緯	87
3. 調査の概要	90
4. 出土遺物	92
5. 小 結	96
須恵器計測表	102
図 版 1～17	105～121

第1章 岩 畑 遺 跡

1. 位置と環境

栗東の地形は、南部の金勝山地、中央部の丘陵地、北西部にひろがる沖積平野の3つに大別されている。岩畑遺跡は、野洲川をはじめとする大小河川によって形成された沖積平野の扇状地に区分され、その内の自然堤防状微高地に立地している。標高は、おおむね109m前後である。

岩畑遺跡の存在する野洲川左岸一帯は、高野、辻遺跡が隣接して集落群を形成しており、特に古墳時代においては、いずれの遺跡も県下を代表する遺跡として知られている。以下、過去の調査成果から時代を追って概観していくことにする。

〈縄文時代以前〉

現段階においてこの付近に生活の営みがみられるのは、縄文時代中期からである。1989年度の辻遺跡（A地点）の調査において土坑が確認されている。続いて縄文時代後期の河道が1988年度の県道高野守山線（B地点）の調査で確認されている。また、この付近の調査では、縄文時代晩期の土器がところどころで少量出土しているが、遺構としては不明である。

〈弥生時代〉

弥生時代の存在を示すものは、後期の土器が高野遺跡の住居等の遺構からわずかに出土している以外は皆無であり、はっきりしない。

〈古墳時代〉

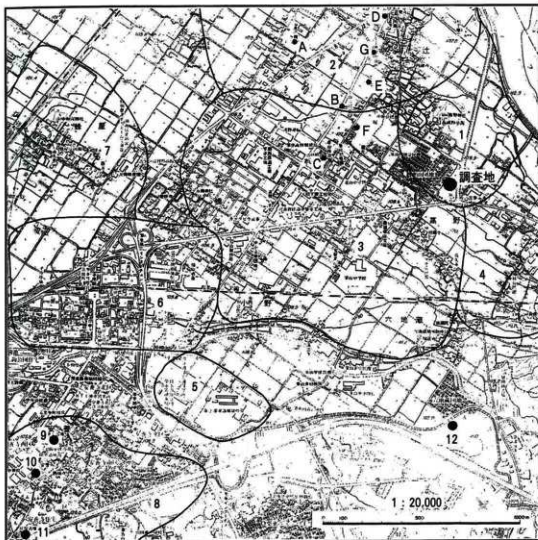
古墳時代では、高野遺跡の成立によって開始される。この集落は、国道1号線付近を境に南部と北部に大きく集落が2分されており、1993年度段階で、堅穴住居が70棟以上確認されている。なかでもC地点の調査では、堅穴住居から小型仿製鏡が出土している。高野遺跡は、庄内式新段階併行から布留式古段階併行にかけて最も盛んになり、それ以後徐々に集落の規模は縮小していく。かわって辻、岩畑遺跡において集落の拡大化が始まる。現在までに2つの集落を合わせて400棟以上の堅穴住居が確認されている。岩畑遺跡は武器・農具等の鉄器を多量に所有していた集落であり、辻遺跡は玉類をはじめとする滑石製品の製作、さらに須恵器をいち早く導入した集落で、これらの背景には渡来人による新たな技術導入が考えられる。そしてその一端が安養寺山周辺に存在する、椿山、新開古墳等の遺物にも伺える。

〈白鳳時代〉

辻、岩畑、高野遺跡ともに堅穴住居はいぜんとしてつくられているが、一方で掘立柱建物の進出が顕著にみられる。1988年度辻遺跡の調査（D地点）では、区画施設をもち、計画的配置をもった倉庫等の遺構が確認され、担当者は官衙もしくは有力者層の建物であったと想定している。

〈奈良～平安時代後期〉

奈良時代の遺構としては、岩畑遺跡の南部地区で掘立柱建物が集中して確認されている。東山道から東海道へぬける道沿いに栄えた集落である。平安時代前期では、1985年度高野



- | | | | | |
|--------|--------|----------|----------|--------|
| 1 岩畑遺跡 | 4 林遺跡 | 7 蜂屋遺跡 | 10 大塚越古墳 | A～F |
| 2 辻遺跡 | 5 小野遺跡 | 8 安養寺古墳群 | 11 新開1号墳 | 調査地点 |
| 3 高野遺跡 | 6 手原遺跡 | 9 椿山古墳 | 12 岡山古墳 | (本文参照) |

図1 岩畑遺跡と周辺主要遺跡

遺跡（C地点上層）の調査で、掘立柱建物が3時期にわたって確認され、有力氏族の居宅の可能性が考えられている。この頃から成立したと思われる「高野庄」との関連が注目される遺構である。また遺物では、1988年度辻遺跡（E地点）の調査で、「印真」と刻まれた銅印が出土している。

〈平安時代後期～鎌倉時代〉

各遺跡で集落のまとまりがみられるが、その中で特筆すべきものに辻遺跡周辺に登場した鋳物師関連の遺構がある。1988年度高野遺跡（F地点）の調査では、鋳造炉と思われる遺構や、鋳型、炉壁片を廃棄した土坑等が確認されている。

〈室町時代以降〉

この時期は、全体として田、畑の占める割合が多かったと思われ、ほとんどの調査地点で栗太郡条里（N-33°-E）に併行した耕作溝が認められる。耕作遺構の他には、1991年度辻遺跡の調査（G地点）で、文献や梵鐘の製作で知られる太田猪三郎との関連が考えられる鋳物工場の一部と思われる遺構が確認されている。鍋、釜、梵鐘等の鋳型の他、彈丸の鋳型が出土している。また、瓦製造用の粘土を採ったとされる土坑も多数存在する。

参考文献

- ①『栗東の歴史』第一巻古代・中世編 栗東町史編さん委員会 1988
- ②『埋蔵文化財発掘調査昭和63年度年報』財団法人栗東町文化体育振興事業団 1989
- ③『埋蔵文化財発掘調査1989年度年報』財団法人栗東町文化体育振興事業団 1990
- ④『埋蔵文化財発掘調査1990年度年報』財団法人栗東町文化体育振興事業団 1991
- ⑤『栗東町埋蔵文化財発掘調査1991年度年報』財団法人栗東町文化体育振興事業団 1992
- ⑥『栗東町埋蔵文化財発掘調査1992年度年報』財団法人栗東町文化体育振興事業団 1993
- ⑦ 木戸雅寿『高野遺跡発掘調査報告書』県道高野・守山線特殊改良工事に伴う 滋賀県教育委員会 財団法人滋賀県文化財保護協会 1986
- ⑧ 平井美典『栗東町高野遺跡発掘調査報告書』琵琶湖大橋有料道路建設工事に伴う 滋賀県教育委員会 財団法人滋賀県文化財保護協会 1987
- ⑨ 木戸雅寿・細川修平・清水尚『高野・辻遺跡発掘調査報告書Ⅱ』県道高野・守山線特殊改良工事に伴う 滋賀県教育委員会 財団法人滋賀県文化財保護協会 1990

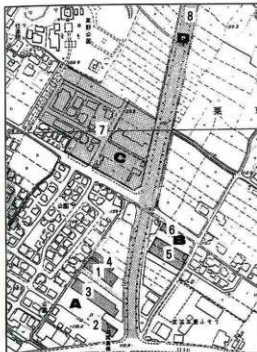


図2 調査地と周辺既存調査地

2. 調査の経緯

本調査地は、滋賀県栗太郡栗東町大字林字高丸 307-1に所在する。調査地周辺は、1990年度に両隣（図2-3、4地点）を調査しており、古墳時代の堅穴住居をはじめ、平安から鎌倉時代にかけての掘立柱建物を確認されている。この調査以前にも高野神社周辺の区画整理や琵琶湖大橋有料道路の事前調査でやはり古墳時代の堅穴住居が数100棟検出されている。このような状況から、本調査地においても集落のひろがりが見込まれていた。

調査は、井上弘一氏が計画する倉庫建設に伴う事前調査で、調査面積は約800㎡である。現地調査は1991年5月29日から同年9月4日にかけて行われ、その後整理作業を開始した。



写1 調査地周辺から三上山を望む



写2 作業風景（SH-6）

調査日誌（抄）

- 5月29日 道具運搬・重機による表土除去。
- 6月1日 排水溝づくり、遺構検出。
- 6月4日 遺構検出状況写真撮影。
- 6月8日 遺構掘削開始（各遺構の断面図、遺物出土状況図、各遺構、遺物出土状況の写真撮影）
- 7月3日 遺構略図作成。
- 7月8日 くい打ち。1/20遺構図作成開始。
- 8月26日 調査区全体清掃、全景写真撮影。
- 9月3日 カマドの断ち割り等補足作業。
- 9月4日 埋め立て開始。
- 9月7日 調査終了。

3. 調査の概要

(1) 基本層序 (図3)

上層から数えて第1層は、耕作土(層厚約0.08~0.2m)、第2層は、灰黄色土層(層厚0.04~0.14m)、第3層は、橙黄色床土層(層厚0.04~0.07m)で遺構が認められる黄灰色土の面に達する。調査区の南東部では、旧河道の影響で、茶褐色気味の礫が混じった土層がみられる。また調査区北部にかけて、やや遺構面が下がっている。

(2) 検出遺構

① 竪穴住居(SH)

SH-1 (図13・図版3、4)

調査区南隅に存在し、北側の一角が確認されている。住居は、北辺5.6m以上、西辺2.7m以上の方形を呈すると思われる。深さは最深で0.36mである。床面は部分的に貼り床となっている。検出した部分の床には柱穴は認められないが、北西隅に径0.56×0.48m、深さ0.58mの土坑を認める。また北西隅の土坑北側に、検出面より一段下がったテラス(仮称テラス状遺構)が存在する。北辺の中央付近にカマドが存在する。逆さにした高杯を支脚として使用しており(図版4-2)、土器がつぶれた状態で出土している。カマドの右袖から西側に向かって幅約0.4~0.6m、長さ約2mにわたり炭化物の混じった部分が認められた。L字形煙道のようなカマドに伴うものなのか、部分的に違う土がたまたま存在したのか等いろいろなケースが考えられるが、性格は不明である。出土遺物に(1~11)がある。時期はおおむね6世紀前半頃のものと考えられる。

SH-2 (図14・図版5)

調査区南辺の中央付近に存在し、一部南隅が調査外にかかる。住居は、約5×3.5mの方形を呈し、深さは最深で0.08mである。床面は、堅く踏みしめており、西辺北寄りと南辺中央やや東にピットが認められる。しかし柱穴らしきものはない。一方、東辺中央やや南寄りにカマドが存在する。少し離れた東側には、小さなピットが存在し、そのピットを含んだ幅約0.2m、長さ0.6m強の部分が炭化している。カマドに関連した施設の一部である可能性をもつ。出土遺物に(12~15)がある。これらの遺物より、7世紀後半の所産

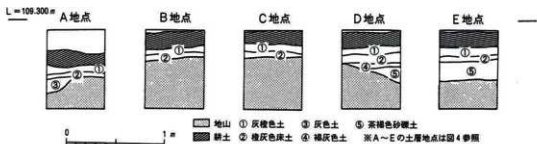


図3 調査区 北壁断面図

と考えられる。

SH-3 (図13・図版3)

調査区北側に存在し、旧河道によって切られている。検出したのは住居の南側から東側にかけての部分で、南辺4.5m以上、東辺2.8m以上になる。主柱穴は、一部分の検出のためはっきりしないがP1がそのひとつと思われる。東辺に炭化層が堆積しており、それを丁寧にはずしていくと、壁から約0.6m離れたところに円形(径 0.4×0.36 m)の焼土面が検出された。カマドの残がいのと思われる。炭化面が存在した部分を除く周囲には、壁溝がめぐっている。また、南辺東寄りには貯蔵穴と思われる方形の土坑が存在する。この付近には小ピットが4ヶ所みられ、中には土坑に伴う施設のピットとして存在したものがあったと思われる。出土遺物には、(24~27)がある。これらの遺物より、5世紀中頃から後半頃の所産と考えられる。

SH-4 (図15・図版5)

調査区北西側に位置し、SH-5を切る形で存在する。一边が約3.7~4 mのほぼ正方形で、深さは最深で0.58 mである。床面は、中央部が貼り床によって台形状に高まっている。主柱穴らしきものはないが、西辺のコーナー部分にピットが1ヶ所認められる。一方カマドが北辺東寄りに認められる。このカマドはいわゆるL字形煙道カマドといわれているもので、煙道が北の壁に沿って東にのびている。カマドの支脚として、SH-1同様に高杯を逆さにして利用している。また、北辺と東辺のコーナー、カマドの右に接して、貯蔵穴と思われる土坑が存在する。出土遺物に(29~55)がある。5世紀中頃から後半頃の所産と思われる。

SH-5 (図15・図版6)

調査区の北西側に位置し、SH-4に切られている。一边が東西6 m、南北6.2 mの方形を呈し、

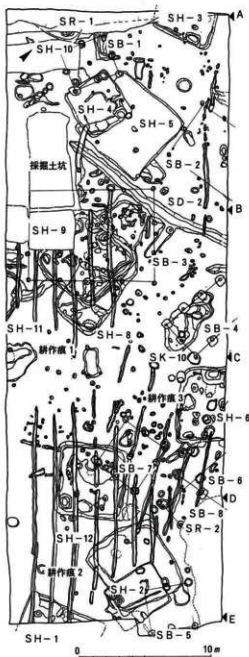


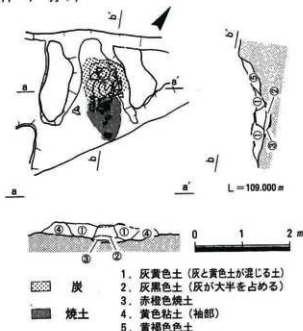
図4 調査地遺構図

深さは0.08～0.14mである。床面に3ヶ所ピット（P1～P3）が認められるが、通常よくみられる4本柱の柱穴は存在しない。また、貯蔵穴と思われる土坑や壁溝も存在しない。一方、東辺の中央付近から南側にかけて、礫を多量に含んだ層が堆積して、まわりには多量の土器が廃棄されていた（図版6-2）。この部分に炭化物がところどころ混じっているが、炉、カマド等の施設が存在した形跡はみられない。出土遺物には、(56～111)がある。これらの遺物より5世紀前半頃の所産と思われる。

SH-6（図17・図版7）

調査区東側中央やや南側に位置し、住居の西半分が確認されている。規模は一辺が東西3.5m以上、南北5.5mのほぼ方形を呈するものと思われる。深さは、検出面より、0.36～0.4mである。主柱穴と思われるピットは2ヶ所（P1、P2）確認している。本来は4本と思われるが、残り2本は調査区外で確認できなかった。北辺に方形状を呈する土坑が存在し、そのテラス部分の南側に、砂礫が帯状に敷き詰められている。また、土坑の両脇、壁よりには2ヶ所の小ピットが認められる。土坑の蓋に関連するものか、もしくは祭壇のような施設に伴うピットであったことが考えられる。土坑の両側に高杯(114)と壺(118)が出土しており

SH-1 カマド



SH-2 カマド

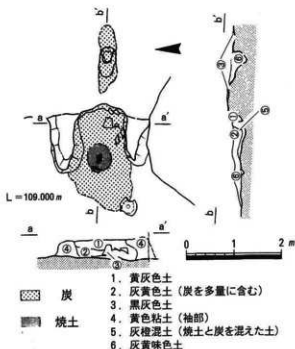


図5 SH-1、2 遺物出土状況及断面図

(図版 7-1)、土坑が埋まった段階で祭祀行為をしていた可能性がある。土坑に伴う砂礫帯との関連が注目される。住居のまわりには壁溝がめぐっており、土坑の東側にはしきり溝のようなものも存在する。また壁溝近くには、小穴がいくつか認められ、壁のしきり、もしくは板壁をおさえるためのピットであったかもしれない。一方、中央やや北側寄りに、径約0.52 mの範囲で焼土面が存在し、炉と思われる。炉のまわり、特に土坑側(北側)に向かって炭化物が集中していた。また、西辺中央、壁溝に接して少し窪んだ部分がみられるが、入口であった可能性が考えられる。尚、この住居は壁際の壁溝にあたる部分に炭化物が一面に認められたが、板材が燃えたというより、葦もしくは茅のような屋根をふくときに使用する植物が燃えているように見受けられた。住居が火事になったか、意識的に不用物を燃やしたのか判断しにくい、が、板材と思われるような顕著なものは存在しなかった。出土遺物には前述の土器の他に(112,113,115~117)がある。これらの遺

SH-4 カマド

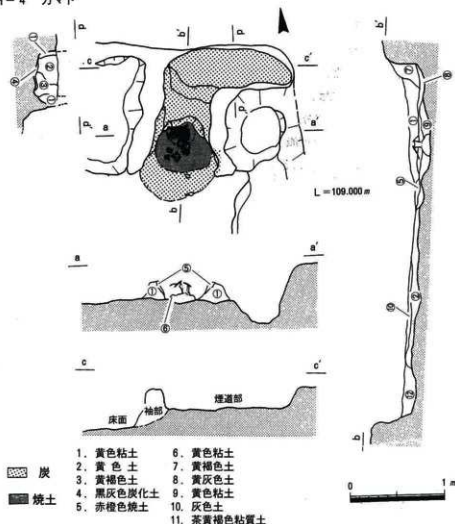


図6 SH-4 カマド 遺物出土状況及び断面図

物により4世紀末から5世紀前半頃の所産と思われる。

SH-7 (図14・図版4)

調査区南側に位置し、SH-2に切られている。一辺が東西5.6m、南北6mの方形を呈し、深さは最深で0.16mである。床面には、通常よくみられる4本主柱穴はなく、SH-5と同様な3つのピットがみられる。まわりに壁溝は認められないが、南辺と東辺および西辺の一部に床面よりやや高くなった部分がみられる。また、西南部に0.8×1.6mの範囲で焼土がみられたが、炉がこの部分にあったとは断定できない。遺物は、西側を中心に(119~134)が出土している。これらの遺物より、5世紀前半頃の所産と考えられる。

SH-8 (図17・図版8)

調査区の中央付近に位置し、SH-9を切って存在する。北から西にかけて埋土の区別がはっきりしなかったため、プランが一部不明確である。住居の規模は、およそ一辺東西3.8m、南北4.8mの方形になると思われ、深さは最深で約0.35mである。床面に明確な主柱穴は存在しないが、東辺と北辺のコーナーに2ヶ所と南側に小さなピットがいくつか認められる。東辺中央やや南側に炭化物が堆積しており、これを少しずつ除去していくとカマドの袖に使われていたと思われるわずかな黄色粘土の痕跡と、壁から約0.8m離れたところに焼土面が認められた。その南側にあたる東辺と南辺のコーナーには、約0.6×1m、深さ約0.6mの土坑が存在する。また、土坑の南側に階段状になったテラス部分が認められる。(図版8-3)。さらに南辺の中央から西にかけて窪みが見られ、入口であった可能性もある。まわりには壁溝は認められない。出土遺物は(135~141)がある。時期はおおむね5世紀後半頃と思われる。

SH-9 (図17・図版8)

調査区の中央やや西寄りに存在し、SH-8に切られている。規模は、一辺が東西6.2m、南北5.8mの方形を呈し、深さは0.4~0.45mである。床面には、10数個のピットが認められる。その内のP1~P4が主柱穴である。南辺と東辺のコーナーに2ヶ所のピット(P5、P6)が存在し、何らかの施設が存在していたと思われる。また、貯蔵穴と思われる土坑が北辺中央(K1)と北辺と西辺のコーナー(K2)に存在する。K1土坑は、南側に砂礫の混じった土を敷いており、SH-6と同様なものが存在していたと思われる。さらに南辺西寄りのコーナーに細かい砂が堆積した浅いピットが存在していたが性格は不明である。壁溝は、K1土坑とK2土坑が存在する北辺の西側を除いて全て存在し、東辺で拡張の跡がみられる。また南辺中央付近にしきり溝のようなものが存在する。さらに北辺のK1土坑西隣には、浅い窪みがみられ、前述したように壁溝が存在しないことから、入口であった可能性が考えられる。出土遺物には(142~150)がある。これらの遺物より、4世紀末から5世紀前半頃の所産と考えられる。

SH-10 (図18・図版7)

調査区の北西隅に位置し、旧河道によって削平を受けているため、南側の一部しか残存しない。規模は、東西 2.4 m 以上、南北 1.1 m 以上の方形を呈するものと思われ、深さは 0.24~0.32 m である。北辺と東辺のコーナーに貯蔵穴と思われる土坑が認められる。壁溝は存在しない。土坑から高杯の脚が出土している（図版 7-4）。5 世紀後半の所産と思われる。

SH-11（図18・図版7）

調査区西側に北から東側の一角が確認されている。規模は北辺 2.2 m 以上、東辺 3.4 m 以上の方形プランを呈すると思われ、深さは最深で約 0.25 m である。周囲には、壁溝がめぐっている。東辺と北辺のコーナーに溝が存在するが、住居との明確な埋土の違いが認められず、住居に伴うものなのか判断しかねる。出土遺物は細片がほとんどであるが、図示できるものとして甕（28）がある。時期は 4 世紀後半頃の可能性がある。

SH-12（図19・図版9）

調査区南側に SH-7 と接して存在する。規模は、東西一辺 5.5 m、南北 5.6 m のほぼ方形を呈し、深さは最深で 0.56 m である。4 本主柱溝造によって構成され、南東コーナーに二段掘りの土坑が存在する。この土坑には、幅約 0.1 cm 前後の板材が炭化して落ち込んでおり、蓋が残っていたと思われる（図版 9-5）。その西側の壁際に 3ヶ所の黄色粘土が残存しており（図版 9-4）、土坑に伴う固定材のようなものであったか、壁に伴うものであった可能性がある。北辺と東辺のコーナーと南辺中央付近を除いた周囲に壁溝が認められる。この部分を掘削していく段階で壁材が炭化した状態で残存していた。また、壁材を固定するためと思われる小さくて浅いピットや黄色粘土が北辺東側に認められる（図版 9-3）。一方住居の中央やや北側に炉と思われる焼土面が存在し、主に北方向に炭化物が集中している。南辺の中央付近には、小石を含んだ楕円形の窪みがみられ、この場所に壁溝が存在しないことから入口であった可能性が想定できる。出土遺物には（160~173）があり、これらの遺物より 4 世紀後半頃の所産と考えられる。

② 掘立柱建物（SB）

SB-1（図7・図版10）

調査区北西隅に位置し、南西部は後世の採掘土坑によって切られている。主軸を N-20°-E にとる建物で、東西 2 間、南北 2 間の総柱の倉庫と思われる。柱間は、東西約 1.6 m、南北約 1.8 m である。柱穴は、周囲が径約 0.5~0.6 m で、中央のみ径約 0.35 m で小さい。深さは約 0.4~0.6 m である。

SB-2（図7・図版10）

調査区北東側に位置し、主軸を N-19°-W にとる建物である。東西 2 間以上、南北 1 間で庇を付す建物と思われるが全体の形は明らかではない。柱間は、東西約 2.0 m、南北約 2.1 m である。柱穴は径約 0.3~0.35 m で、深さ約 0.14~0.3 m である。

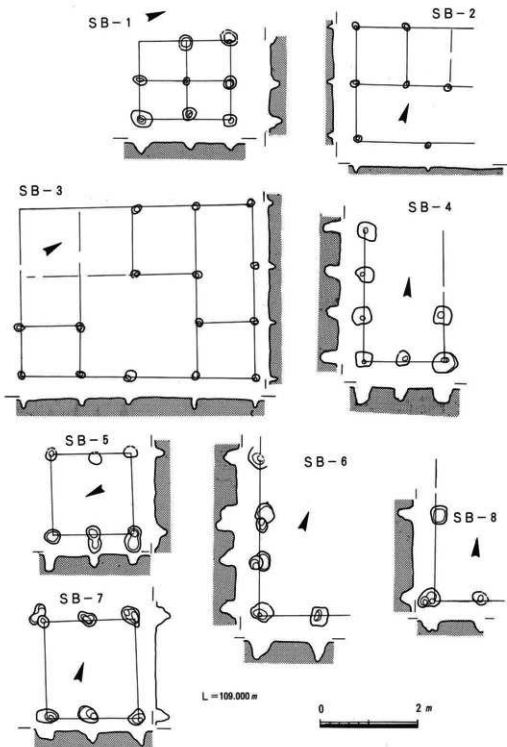


図7 掘立柱建物（SB-1～8）遺構図

SB-3 (図7・図版10)

調査区中央やや北側に位置し、主軸をN-33°-Eにとる建物である。東西3間、南北4間で、柱間は2.1~2.4mである。柱穴は径約0.3~0.4mで、深さ0.2~0.35mである。

SB-4 (図7・図版10)

調査区のはぼ中央東端に位置し、主軸をN-7°-Wにとる建物である。東西2間、南北3間で、柱間は1.6~1.8mである。柱穴は隅丸方形を呈し、一辺が約0.6~0.8mで、径約0.14~0.2mの柱痕が存在する。深さは0.47~0.74mである。

SB-5 (図7)

調査区南東隅に位置し、主軸をN-27°-Eにとる建物である。東西1間、南北2間の建物で、柱間は、東西3.1~3.2m、南北1.6~1.8mである。柱穴は、径約0.4~0.5mで、深さ約0.3~0.46mである。

SB-6 (図7)

調査区南東隅に位置し、主軸をN-21°-Wにとる建物である。東西1間、南北3間の建物と思われ、柱間は、約2.0~2.2mである。柱穴は、径約0.25~0.3mで、深さ約0.3~0.6mである。

SB-7 (図7)

調査区中央から南へ下がったところに存在し、SH-12を切っている。主軸はN-20°-WでSB-6とほぼ同一軸である。東西2間、南北1間で柱間は東西約1.7~1.9m、南北約3.8~4.2mである。柱穴は、径約0.6~0.8mである。

SB-8 (図7)

調査区南東隅にSB-6と接して存在する。主軸はN-6°-EでSB-4とほぼ同一軸である。東西1間以上、南北1間以上で、柱間は2.0~3.5mである。柱穴は径約0.6~0.95mで、深さ0.2~0.55mである。

いずれの建物も出土遺物にめぐまれず、小さい土器がみられるにすぎない。このため時期を決定することは容易ではない。しかし、埋土状態、建物の形態、柱穴の特徴、さらには、周辺の調査例を勘案して大まかな時期を示すならば、SB-2, 3が平安時代後期から鎌倉時代に含まれる建物で、それ以外は奈良から平安時代前期にかけての建物の可能性が高い。

③ 土坑・落ち込み(SK)

土坑もしくは落ち込みは、大小含めて数10ヶ所存在する。この中で時代を明確にできるものはSK-10のみである。それ以外は掘立柱建物同様に埋土状態で判断した。尚、採掘土坑については後述する。

SK-10 (図版10)

調査区のはぼ中央東端に存在し、SB-4に切られている。規模は、東西約2.3m、南北約5.4mで細長い不整形を呈する。深さは、最深0.52mで、底は舟底状を呈する。時期は出土遺物(22, 23)より6世紀中頃と考えられる。

④ 溝(SD)

SD-2 (図版10)

調査区北側に存在し、東から西へのびている。規模は検出した部分で約14m、幅約0.3~0.5mである。深さは0.35~0.45mで、北へいくほど浅くなる傾向を示す。断面形態は逆台形もしくはV字形を呈する。出土遺物は、(16~21)等があり、5世紀中頃から後半にかけての所産と考えられる。

⑤ 旧河道(SR)

調査区の北辺に接して南西から北東へ向けてのびる旧河道SR-1と、東辺の南端に一部存在する旧河道SR-2がある。SR-1は、検出した長さ約17m、幅2.8m以上で、断面観察によれば、深さ1m以上に達する。時期は出土遺物より近代以降のものと思われる。SR-2は、礫混じりの堆積土によって構成され、9m以上にわたって確認されている。部分的な観察しか行っていないので深さ、時期等は不明だが、SB-8を切っているので奈良時代以降には、この部分が埋まっていたことがいえる。

⑥ 耕作痕(図4)

調査区の南側と中央からやや北西にかけて存在する。主軸は、耕作痕1, 2がN-33°-Eで、耕作痕3がN-40°~43°-Wに振る。ひとつのまとまりは、5~6条の溝で構成されている。溝と溝の間隔は、耕作痕1, 2が約1.1~1.2m、耕作痕3が約1.4~1.8mである。幅約0.3m前後で、深さはいずれも0.05~0.1mである。時期は出土遺物にめぐまれず判断しにくい、SB-3を切っていること、および埋土等の観察から近世以降のものと思われる。

⑦ 採掘土坑(図版11)

調査区北西に3ヶ所存在する。平面形態は、長方形と正方形に近い形を連続させたものがある。規模は、長軸約5~7m以上、短軸約2~3.4mである。深さは約0.5~0.7mである。堆積土は砂と粘土によって構成される。

(3) 出土遺物

堅穴住居を中心に出土した土師器、須恵器について、時期別に大きく3期に別けて説明していく。

I期(4世紀後半～5世紀前半)

I期に相当する遺物を出土した遺構として、SH-5・6・7・10・12がある。

土師器

甕A 「く」字状口縁をもつもので、口縁の特徴から3つに細分することができる。

A、口縁部が外上方に直線的にのびるもの(163,164)

A、口縁部が内弯気味に外上方にのびるもの(69, 71, 142～144)

A、口縁部が短く外反し、口縁端部を外へつまみだすもの(72)

調整は、口縁のみ残存するものが多いため明確にいえないが、(45)は外面にハケを施し、内面肩部以下にヘラ削りを施す。口縁部のほとんどは、内外面ともにナデが多い。

甕B 受口状口縁をもつもので、口縁の特徴から5つに細分することができる。

B、口縁部が直立気味にたちあがるもので、口縁端部を丸く仕上げるもの(28, 81, 111, 161)や、わずかに端部をひき出すもの(82)がある。

B、口縁部の下半が水平気味に開き、口縁端部を外傾させて面をもつもの(52)。

B、口縁部が直立気味にたちあがり、口縁の中程で強く屈曲し、端部がひきだされるもの(55, 146, 165)。

B、頸部が「く」字状に屈曲し、口縁端部をひきだして水平な端面をつくるもの(79, 83～86, 129, 167)

B、口縁部外面にゆるやかな屈曲を残す程度で、口縁内面の中程でわずかに受口状を呈し、口縁端部を丸くおさめるもの(169)

B、口縁外面にやや屈曲を残すのみで、内面は直線的でゆるやかに内弯する程度のもの(162)。「く」字状口縁に近い形態を示し、甕A類に含めていいかもしれない。

調整は、体部内外面にナデを施すものがほとんどで、外面の一部にハケを残すもの(146, 169)がわずかに認められる。(146, 169)は、体部内面にタテ方向の指ナデが明瞭に残る。

壺A 口縁部が外反するもので、端部を丸くしあげたもの(60, 100)。調整は、口縁内外面にナデを施す。

壺B 口縁部が内弯して開き、口縁端部を内側に肥厚するもの(160)。調整は、口縁内外面にナデを施し、体部外面の一部にハケを残している。

壺C 口縁部が直線的に外上方へたちあがり、体部が球形を呈するもの(118)。調整は、口縁内外面にナデを施し、頸部以下肩部にかけて外面にハケを残す。体部下半を中心に

ヘラケズリを施す。

小型丸底壺A 口縁部が外上方へ開くもので、体部最大径と口径との関係で細分ができる。

A₁ 口径と体部最大径がほぼ同じか、さほど差がないもの。

A₂ 口径が体部最大径より大きいもの

A₃ 口径が体部最大径より小さいもの

小型丸底壺B 口縁部が二重口縁となるもの(111)

小型丸底壺C 口縁部が体部に比べて比較的長いもの(108)

小型丸底壺D 口縁部が体部に比べて比較的短いもので、口縁の形態で2つに分けられる。

D₁ 口縁が外上方へのびるもの(107)

D₂ 口縁が内弯気味にたちあがるもの(56,123)

調整は、ナデのみによるもの(a類)、ハケを施すもの(b類)、ヘラケズリを施すもの(c類)がある。

高杯A 口縁部がやや屈曲しながら外上方へのびるもので、さらに3つに細分ができる。

A₁ ややあまい稜を残すもの(173)

A₂ 杯上半部と杯底部の明瞭な稜がないもの(96,101,102,171,172)

A₃ 深めの杯部をもつもの(131,148)

高杯B 口縁部が直線的に外上方へのびるもの(91,147)

高杯C 杯上半部と杯底部に明瞭な段をもち、大きく外反しながら口縁へと続くもの(65, 104,106,130)

杯部の調整は、内外面にナデを施すもの(a類)、杯上半部外面にハケを施した後にナデを施し、杯底部にヘラケズリを施すもの(b類)がある。またb類は、杯部内面にハケを施すもの(b₁)とナデのみのもの(b₂)がある。

脚部の形態は、裾部の屈曲が強いもの(68,175)と、ゆるやかに屈曲をするもの(100, 103)がある。また裾部の先端を薄くしあげて面をつくるもの(66,102)と、やや厚みをもち丸くしあげるもの(99,100)がある。脚部の調整は、内外面ともにナデのみのもの、脚部上半部を中心に外面ヘラミガキを施すもの、裾部内外面にハケを施すものがある。

Ⅱ期(5世紀中頃～6世紀後半)

Ⅱ期の遺物は、5世紀中頃から後半の遺物Ⅱ_a、6世紀前半の遺物Ⅱ_b、6世紀中頃の遺物Ⅱ_cに細分でき、Ⅱ_aの遺物を出土した遺構としてSH-3、4、8、SD-2、Ⅱ_bとしてSH-1、Ⅱ_cとしてSK-10が相当する。

土師器

甕A 口縁部が「く」字状を呈するもので、外上方へのびるもの(29～36)。形態的には

時期	遺跡	器A	器B	器A	器B	器C-E	小型丸底器A-F	高杯A-I
I	SH-10							
	SH-12							
	SH-6							
	SH-9							
	SH-5							
	SH-7							
	SH-3							
II	SH-4							
	SH-8							
	SD-2							
	TK73 TK47							
	MT15B, SH-1							
III	TK10B, SK-10							
	SH-2							

図8 遺構別出土器変遷図

I期と大きな変化はない。(2)は、口縁が短く直線的に外反するもので、球形の体部が付属する。調整は、体部外面と口縁内面にハケを施し、口縁外面にナデを施す。

(1)も短く外反する口縁をもち、内面にやや屈曲をもたすもので、(73)はやや内弯気味にたちあがり、口縁端部を厚めに丸くしあげている。

壺D 直立気味に短く伸びる口縁をもち、口縁上方でやや外へカーブするもの(135)。調整は内外面ともにナデを施す。

壺E 直立気味に外上方へのびる口縁をもつもの(27)。体部は欠損するが、体部最大径が口径とほぼ同じか、もしくは体部最大径が口径より大きくなるタイプと推定される。

小型丸底壺D 口縁が直立気味に短く伸び、やや平ら気味の偏球形の体部が附属するもの(10)。調整は、口縁内面にハケを施す以外はナデによる。体部に巻き上げ痕が残る。

高杯D 内弯気味に口縁がたちあがるもので、3つに細分できる。

D: 杯部中央やや底部よりでやや屈曲し、明瞭な稜はもたずに、口縁へ向かってゆるやかにたちあがるもの(40)。調整は、内外面ナデによる。

D: 杯部が半円状に近い形態を示し、口縁端部を外へつまみ出し、内傾する面をつくるもの(24)。稜はない。調整は内外面ナデによる。

D: 底部から口縁にむかって内弯気味にひらき、口縁部で外上方へつまみ出すもの(7)。調整は、一次調整にハケを施した後、杯部上半部を中心にハケをナデ消している。

高杯E 碗状の杯部を付属するもので、単純にたちあがるものE:(1)と、口縁上半部でほぼ垂直にたちあがるものE:(16)がある。調整は内外面ともにナデによる。

高杯F 杯底部から上半部に向かって内弯気味にひらき、口縁端部付近で外反する。口縁部と底部との境に突帯状の稜をもつもの(11)。調整は外面ナデと指おさえにより、内面にハケを施す。

碗 半球形を呈し、丸い底部から内弯しつつ口縁に向かってたちあがるもの(138)。調整は、内外面ともにナデによる。

杯 (41)は、口縁部を短く外上方へつまみ出す小型の杯である。底部は欠損するが、おそらくやや平らな半球形であったと思われる。調整は、内外面ともにナデによる。

須恵器

杯A (23)は、短く内傾するたちあがりをもち、やや扁平な形態を示す。調整は、底部外面を回転ヘラケズリする以外は、回転ナデによる。

杯蓋A (22)は、口縁部を欠損するが、稜は段になって明瞭に残っている。調整は、天井部外面に回転ヘラケズリする以外は、内外面ともにナデによる。

短頸壺 (18)は、口縁から肩にかけての一部が残存する。口縁部は短く外反し、口縁端

部を外傾させて面をつくる。調整は、内外面に回転ナデを施す。体部上半部に2条のあまい凸線を施す。

高杯 (9) は長方形のスカシ孔をもつ高杯脚部で、下方に2条の沈線をもち段をなす。調整は、内外面ともにナデを施す。

Ⅲ期 (7世紀後半)

土師器

甕A (12) は、口縁がやや内弯気味に短く外反する甕で、体部が長胴になるものと思われる。調整は、内外面にハケを施す。口縁外面の一部はハケをナデ消している。

須恵器

杯B (14) は、平坦な底部から口縁に向かって外上方へ開く杯である。調整は、内外面ともに回転ナデによるが、底部には明瞭な巻き上げ痕を残す。

杯C (15) は高台をもつ杯で、体部はゆるやかなカーブをえがき、口縁へと続く。調整は、内外面ともに回転ナデによる。

杯蓋B (13) は、天井部が偏平で内面にかえりをもつ蓋である。本来はつまみが付属していたと思われる。調整は、内外面ともに回転ナデによる。

以上3期に分けて説明してきたが、遺構別の土器変遷を図8に示したので参照されたい。

I期の遺物に関しては、いずれも布留式新段階併行に含まれるが、SH-11, 12の遺物がやや古く、SH-5, 6, 7がそれに続く。小型丸底壺をみていくと、SH-12ではケズリやハケを残しているが、SH-5, 7に関してはナデによるものが大半を占めている。

Ⅱ期は3小期に分けたが、そのうちⅡ₂の遺物としたSH-3, 4, 8には須恵器が含まれていない。須恵器を共伴している他遺跡の比較から考えると、SH-4では、高杯や杯等の特徴がTK216段階前後の土器に共通する。TK208以降とされる安土町慈恩寺SH-12の遺物にも共通点の一部みられることから下限としてはこの時期におきたい。またSH-3, 8では、甕Bの存在はないが、SH-4では、甕Bを含んでいる。しかし出土状況等の判断から混入と考えたい。SH-3, 8では、甕Bはまったく存在せず、碗や高杯等の特徴からTK208段階以降の土器、例えば秦荘町軽野正境SH-1に類例がみられる。SD-2で注目されるのは、須恵器の短頸壺で、形態的特徴およびいねいな調整から判断してTK216段階以降は下らないものと思われる。また高杯E₁は、5世紀後半にもみられることからSD-2の下限を5世紀後半としたい。SH-1, SK-10の須恵器は、前者がMT15、後者がTK10に相当し、6世紀前半から中頃の遺物に比定される。Ⅲ期の遺物としてはSH-2が存在する。かえりをもつ蓋Bや高台をもつ杯Bの特徴からTK48段階にほぼ相当し、7世紀後半頃のものと考えられる。

4. 考 察

(1) 竪穴住居についての検討

竪穴住居の特徴を表1 および図10に示した。以下、土坑、カマド、炉について検討を行う。

① 土坑について

土坑の形態は、方形状のテラスの中に円形状の土坑を掘り込む二段掘りのタイプと、二段掘りにならない素掘りの土坑とがある。前者は、SH-3を除いて全てI期の住居に認められる。二段掘りタイプ土坑の典型的なものはSH-12の例で、前述したように蓋と思われるものが炭化していたことから、方形のテラスは蓋を置くための部分であったことが想定できる。また、SH-6とSH-9に認められた砂礫数をもつ土坑について、以前他の事例をあげて検討したことがある。その結果、砂礫数をもつ住居は大型住居に多く、特定な人物の住居に多いが、岩煙遺跡の例は、他の住居と比べて突出した大

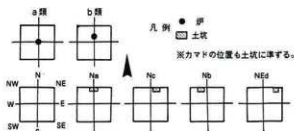


図9 炉・土坑の位置関係図

遺 構	カマドの 位 置	土坑の 位 置	炉の 位 置	壁溝の 幅 (m)	竪 穴 の 規 模 (m)	備 考
SH-1	N	NW			5.6以上×2.7以上	カマド西方向に炭化部分あり
SH-2	E				5 × 3.5	
SH-3	E	SC		0.2~0.25	4.5以上×2.8以上	
SH-4	E	NE			3.7 × 4	
SH-5					6 × 6.2	3本柱穴の可能性あり
SH-6		Na	b	0.15~0.2	3.5 × 5.5	土坑周囲に砂礫数
SH-7					5.6 × 6	3本柱穴の可能性あり
SH-8	E	SE			3.8 × 4.8	
SH-9		NW	a	0.15~0.2	6.2 × 5.8	土坑周囲に砂礫数の痕跡 壁溝の拡張跡あり
SH-10		SE			2.4以上×1.1以上	
SH-11				0.15~0.2	2.2以上×3.4以上	
SH-12		SW	b	0.15~0.2	5.5 × 5.6	

表1 竪穴住居の特徴一覧

きさではないことから、他の集団とは違う特殊な集団もしくは、家族の特徴ともいえるべき例外的なものと判断した。次に土坑の位置についてみていくと、Ⅱ期に関していえば、SH-6, 9が北辺中央(Na)に存在し、SH-12が南東隅(SW)に存在している。土坑は通常南辺に付属する 경우가多いが、この調査区においては3棟中2棟が北辺に付属しており、北辺に土坑が付属するものにいずれも砂礫数が認められるという共通点がみられる。Ⅱ期の土坑は、通常カマドが存在すればカマドに向かって右側に存在する 경우가多く、SH-3, 4, 8がこのタイプに含まれる。ただしSH-3は、方形の二段掘りの形態を示し、辺の隅ではなく辺の中央やや左に存在するb類に含まれる。また、SH-1のみカマドの西側に土坑が存在しているが、通常の土坑より小さく、位置も壁からやや離れた場所に存在することから、特殊な例といえよう。一方、SH-10は部分的な検出のためカマドが確認されていないが、土坑の位置がSH-8と共通していることから、東辺にカマドが存在していた可能性が高い。

② 炉について

炉を検出した住居にSH-6, 9, 12の3棟が存在する。形態は、円形もしくは不整形円形である。深さは、最深で0.02m程のものであり、ほとんど地山が焼土化している程度のものである。炉のまわりに存在している炭化物は、SH-6, 12に認められ、いずれも北側に向かってひろがっている。SH-12の場合は、炉の北側前方がややくぼんでいる。炉の位置は、住居の中央に存在するもの(a類)、中央からやや離れて存在するもの(b類)に分けられる(図9)。SH-9はa類で、SH-6, 12がb類に相当する。b類は中央か

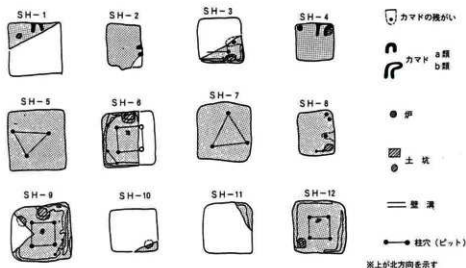


図10 竪穴式住居 (SH-1~12) 模式図

ら北方向に離れるものばかりで、距離は0.58~0.6 mでほぼ一定している。SH-6, 9, 12の時期は前述したように4世紀後半から5世紀前半(布留式新段階併行)の住居であるが、岩煙遺跡の調査区例や周辺の高野遺跡例をみていくと、この時期は、a類とb類が混在している場合が多い。また庄内式併行期から布留式古段階併行期の住居では、一部を除いてa類が大半を占め、布留式新段階併行期になってからb類が増加している傾向がみられる。炉の位置が中央から少しずつ離れていくことは、住居内の空間を有効的に利用するためのものであり、カマドと同様に厨房施設をある一方に寄せるための変化ではなかったかと思われる。

③ カマドについて

今回の調査では、SH-1, 2, 3, 4, 8の5棟の竪穴住居からカマドが検出された。カマドの構造は、通常よくみられる住居の辺に対して直行して造り付けられるa類と、L字状に煙道が屈曲するb類(以下L字形カマドと略す。)が存在する。SH-4以外はすべてa類に含まれる。カマドは、集落および集団の違い、住居間の位置関係、さらには立地関係等によってさまざまなあり方がみられる。周辺の調査区を含めて、カマドの方向に注目してみると(図11)、A区(1~4調査区)の南部では、北方向の志向性が強いグループが存在し、北部では、L字形カマドを除けば東の志向性が強いことがいえる。またB区の南部方面では、L字形カマドを含む北辺と東辺に付属するカマドが混在して存在し、北部では北辺志向が強いグループと、L字形カマドを含む東志向が強いグループに分けられる。この結果が示しているように、同一集落内においても集団によってカマドの方位の志向性が違っていることがいえた。この状況は甲良町下ノ郷遺跡や守山市吉身南遺跡でもみられる。

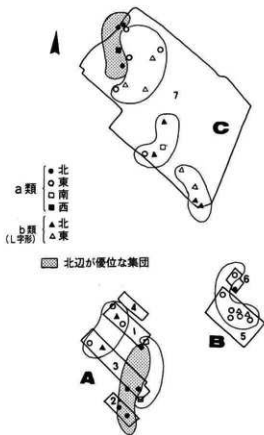


図11 カマドの方位からみた集団の単位

(2) L字形カマドをめぐる背景について

L字形カマドは、和歌山県和歌山市田屋遺跡、兵庫県神戸市郡家遺跡、京都府綾部市青野、綾中遺跡例に代表され、九州、中国地方にも散見されるが、未だ検出例は少なくごく限られた地域でしか確認されていない。近江では、能登川町西ノ辻遺跡、日野町野田道遺跡、栗東町岩畑遺跡、同辻遺跡に加えて、近年宮崎幹也氏によって安土町慈恩寺遺跡例や秦荘町軽野正境遺跡例もL字形カマドであることが指摘されている。合計6遺跡となり、現段階ではもっとも検出例の多い地域となっている。L字形カマドの系譜に関しては、朝鮮半島にみられるオンドルに共通点がみられることから、その系譜をひくものと考えられてきた。宮崎氏は、L字形カマドの機能は、第一に厨房、第二に暖房であり、床暖房を第一の機能とするオンドルとは大きく異なるとされ、中国北西部・北東部に広く分布する「カン」に類例をもとめた。筆者は以前、岩畑・辻遺跡のL字形カマドをもつ集団が、伽耶から来た渡来人によってもたらされたものである可能性を述べたことがある。辻遺跡のL字形カマドからは、韓式系の鍋・平底鉢、甗等が出土し、同一集落内では、伽耶南部系と考えられる陶質土器も出土している。また、岩畑遺跡においても韓式系土器が出土していることから渡来人との関連を考えた。このようなことを頭において、岩畑遺跡におけるL字形カマドについて若干の検討をしてみた。

岩畑遺跡におけるL字形カマドは、現段階で総数14棟確認されている。時期的には、TK216 段階前後に集中してみられ、6世紀前半まで存在していたとされる。構造的には、宮崎氏が分類したように、住居内に構築する煙道部の基底部を、地山掘削時の掘り残しによって作る場合(Aタイプ)、住居床部に盛り土をする場合(Bタイプ)、住居外部の地山を掘削して煙道とする場合(Cタイプ)の3つに大きく分けられる。岩畑遺跡では、1調査区SH-4がAタイプで、Bタイプの例として7調査区のSH-35、Cタイプの例として5調査区のSH-07があげられる。では岩畑遺跡のL字形カマドの分布状況をみていこう。(図11)。

A区では、カマドを確認できた住居が12棟存在し、その内L字形カマドは1と3調査区にそれぞれ1棟ずつ存在し、6棟につき1棟の割合でL字形カマドが存在することになる。しかし時期差を考慮すればもう少し高い比率になると思われる。B区では9棟中に2棟確認され、4～5棟につき1棟の割合となる。C区では、19棟中9棟でほぼ2棟に1棟の割合でL字形カマドが存在し、高い比率を示している。さらに、C区を仮にa～dのグループに分けると、aではカマドをもつ住居が4棟存在するがL字形カマドは存在しない。bでは、7棟中3棟存在し、2～3棟に1棟の割合となる。cでは4棟中2棟で、2棟に1棟の割合で存在する。dでは4棟中すべてL字形カマドである。cとdのグループではL

字形カマドの密度が高いことがいえる。一方、C区から北へ約200m先の調査区では、9棟の住居でカマドが確認されているが、L字形カマドの存在はない。以上のことをまとめると、C区から離れるほどL字形カマドの存在する率が低くなる結果が得られる。

ところでC区にL字形カマドが多く確認されるということは、前述の考えを尊重すれば、この地区に渡来人が集中して居住していたことにつながってくる。渡来人が岩畑周辺に居住し始めた場所がこの地区であったに違いない。推測するには、渡来人が居住し始めた頃(TK73~TK216段階)はC区を拠点にA、B区等に少しずつ新たな場所を求めて在地集団の中に入り込んでいったと思われる。その過程の中で、次第に日本化が浸透していき、L字形カマドも少しずつ姿を消し、やがて6世紀中頃には消滅してしまったということが推測される。

岩畑遺跡の集落を渡来人と結びつけるものとしてL字形カマド、韓式系土器以外に、鉄器の出土率が高いことがあげられる。近江は古くから鉄器生産の地としてよく知られているが、飛躍して考えれば、資源の豊富な湖南に目をつけて、L字形カマドをもつ住居に居住した集団(渡来人)が、5世紀中頃に鉄器生産を開始したか、もしくは鍛冶、鋳造等の技術をもっていた集団が移住してきたこと等が想定できる。岡山県山陽町門前池東遺跡のL字形カマドをもつ住居では、床面から鉄滓が出土している。このことから鉄加工等の技術をもった渡来工人在住んでいたことが想定されているように、渡来人=L字形カマド・鉄器生産の3つの関係が密接につながっていたことがいえよう。また、岩畑遺跡と南西3kmに存在する新開古墳が密接な関係をもっていたことが従来から想定されている。新開古墳からは、多量の馬具、武具が出土しているが、その中には木心鉄板被輪鍔、鉄地金銅透彫鏡板付鉄轡、十字形蛇行鉄器等が存在し、渡来人との関係をおぼすようなものが含まれている。新開古墳の遺物はTK216前後の時期とされ、L字形カマドが盛行する5世紀中～後半とほぼ一致している。さらに安養寺古墳群には、比較的近い時期に首長墓系列のひとつである椿山古墳が存在する。新開古墳は、この系列とは別とする考え方もあることから、新開古墳の被葬者は、渡来人自身もしくは渡来人と密接に交流をもっていた岩畑遺跡周辺の首長的存在の人物であったと思われる。また、通常は鉄器生産等にたずさわっているが岩畑遺跡周辺が、交通の要衝ということもあって、いざ戦争が始まれば、軍事をまかされた人物であったことが考えられる。それに対して椿山古墳の被葬者は、ほぼ旧郡単位で支配権をもち、新開古墳等の被葬者も手中に治めていた有力な人物であったにちがいない。

参考文献

- 1) 宮崎幹也 「カマドの採用と普及—L字形カマドの復原」『古代社会の諸相』角田文衛先生寿賀記念 1993
- 2) 大崎隆志 「近江栗太郡安養寺古墳群についての二・三の検討」『滋賀考古』第7号 滋賀考古学研究会 1992

- 3) 近藤 広 「カマドからみた集落構成」『遺蹟考古』第8号 遺蹟考古学研究会 1992
 4) 近藤 広 「住居内土坑の検討」『遺蹟考古』第9号 遺蹟考古学研究会 1993
 5) 杉浦隆文 「カマドをもつ竪穴住居について」『能登川埋蔵文化財調査報告書第30集』 能登川町教育委員会 1993
 6) 青山 均 「特殊カマド跡の性格について」『穴太遺跡(弥生町地区)発掘調査報告書』 大津市埋蔵文化財調査報告書
 (15) 大津市教育委員会 1991

5. 小結

今回の調査で確認された遺構は、以下のように7期に分けることができる。(図12)。

- I期 古墳時代前期(4世紀後半～5世紀前半) SH-5, 6, 7, 9, 11, 12
 II期 古墳時代後期(5世紀中頃～6世紀中頃) SH-1, 3, 4, 8, 10, SK-10
 III期 白鳳時代後期(7世紀後半) SH-2
 IV期 奈良時代前期～平安時代前期(8世紀～11世紀) SB-1, 4, 5, 6, 7, 8
 V期 平安時代後期～鎌倉時代(12世紀～13世紀) SB-2, 3
 VI期 室町時代～江戸時代(15世紀～19世紀) 耕作度
 VII期 明治時代～昭和初期(19世紀後半～20世紀中頃) 採掘土坑、旧河道

この中で特に注目されるのは、古墳時代の竪穴住居の構造で、砂礫敷をもつ土坑、土坑

に存在した蓋、L字形のカマド、壁材のあり方等興味深い資料がたくさん得られた。特にカマドについては、その方位の分析によって岩煙遺跡の集団構造の一部がわかってきた。また、L字形カマドの存在を渡来人と結びつけ、さらには鉄器生産との関連から安養寺古墳群に存在する新開古墳と椿山古墳の被葬者の性格について若干の私見をのべさせてもらった。しかし、今後の調査で展開が変化してくる可能性も充分に考えられるので、一応現段階のまとめとして報告を終わりたい。

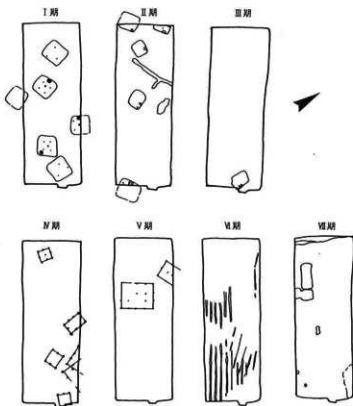
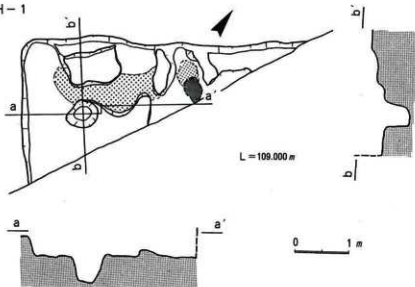


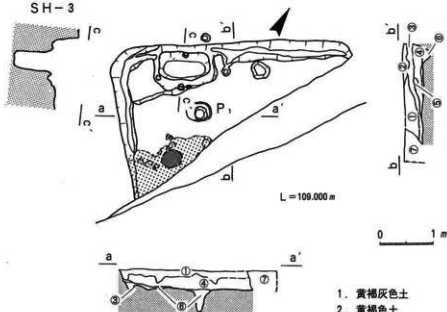
図12 岩煙遺跡遺構変遷図

SH-1



炭
焼土

SH-3



炭
焼土

1. 黄褐灰色土
2. 黄褐色土
3. 褐色土
4. 褐黄色土
5. 灰黄色土 (やや2層に近い)
6. 濁灰褐色土 (少量の炭が混じる)
7. 灰黄色混砂礫土 (旧河道埋土)

図13 SH-1,3 遺構図

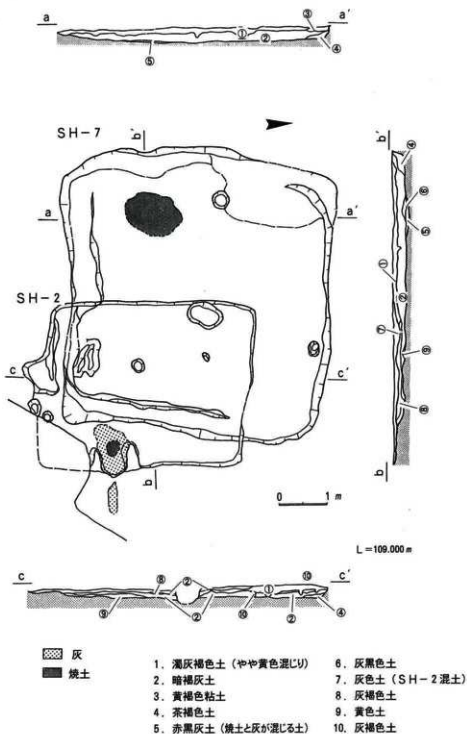


図14 SH-2,7 遺構図

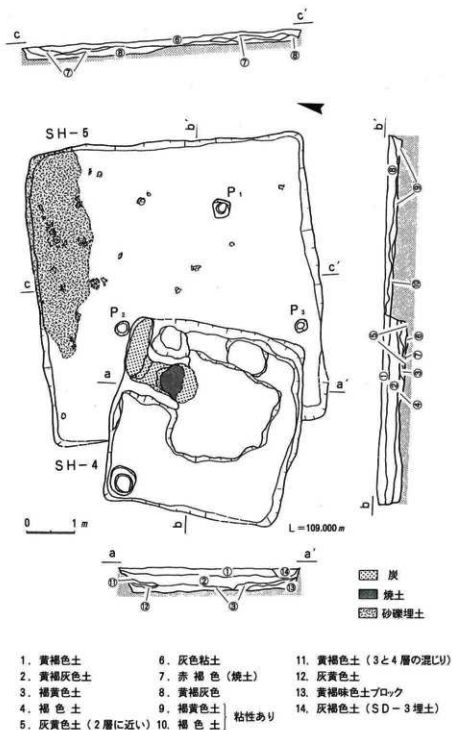
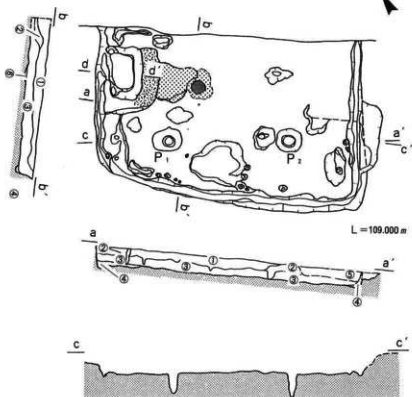


図15 SH-4,5 遺構図

SH-6



0 1 m

炭
焼土
砂礫敷

1. 濁灰褐色土 (土器を多量に含む)
2. 黄灰褐色土
3. 褐黄色
4. 暗灰色土
5. 灰色土 (奈良時代以後の掘り込み)
6. 暗灰黒色炭化土 (部分的に焼土少量含む)
7. 褐黄色土
8. 褐灰色土
9. 褐黄灰色土
10. 黄色土ブロック

図16 SH-6 遺構図

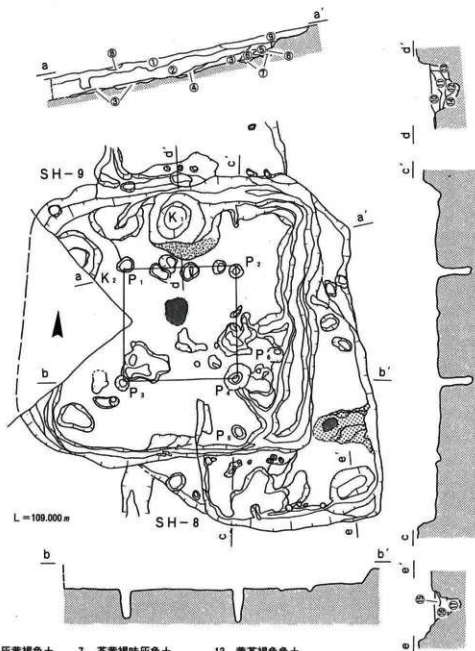
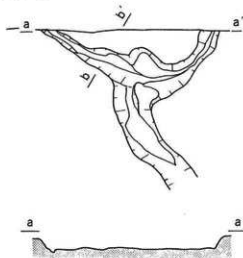
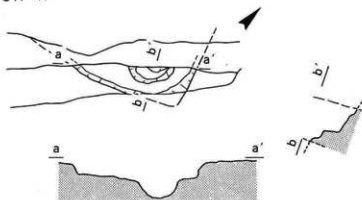


図17 SH-8.9 遺構図

SH-10



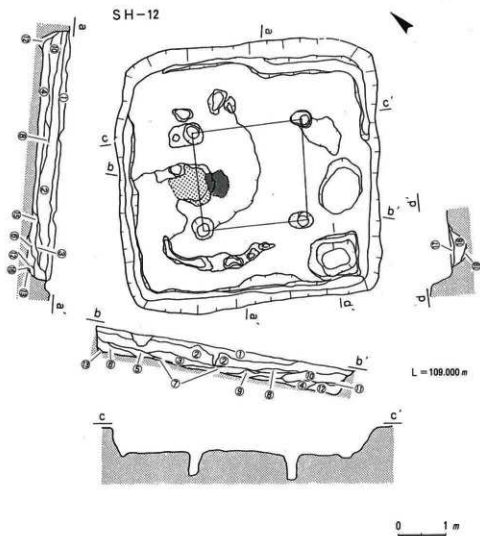
SH-11



L = 109,000 m

0 1 m

圖18 SH-10,11 遺構圖



- | | | |
|----------|------------|--------------------|
| 1. 茶灰色土 | 7. 黄褐色土 | 13. 黄褐灰色土 |
| 2. 茶褐色土 | 8. 黄色土 | 14. 褐灰色土 |
| 3. 暗褐茶色土 | 9. 暗茶褐色土 | 15. 黄色土混褐色土 (ブロック) |
| 4. 明茶褐色土 | 10. 茶褐灰味色土 | 16. 黑灰色炭化土 |
| 5. 褐色土 | 11. 暗褐色土 | 17. 暗褐色土 (やや砂質) |
| 6. 明茶褐色土 | 12. 褐茶灰色土 | 18. 褐色土 |
| | | 19. 褐色土 |
- 土坑

炭
焼土

図19 SH-8.9 遺構図

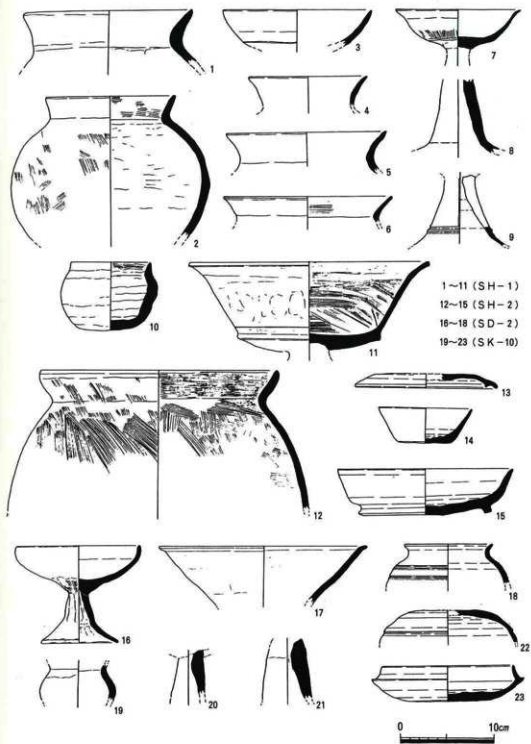


图20 SH-1, 2 · SD-2 · SK-10 出土遺物

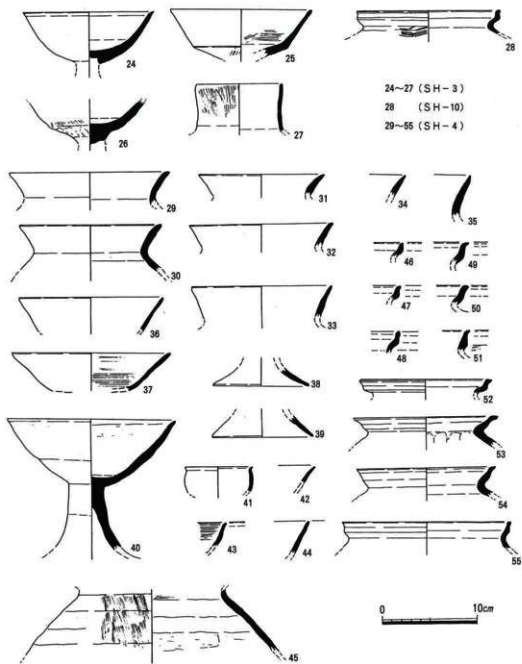
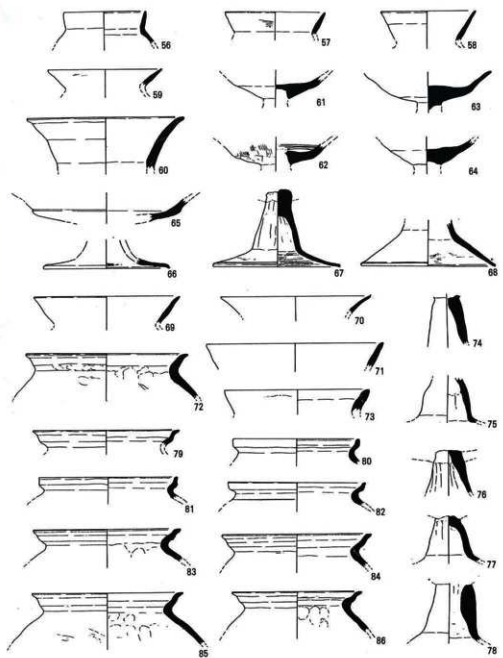


图21 SH-3, 4, 10 出土遺物



56~61 SH-5 埋土中

62~86 SH-5 土器群

0 10cm

图22 SH-5 出土遺物

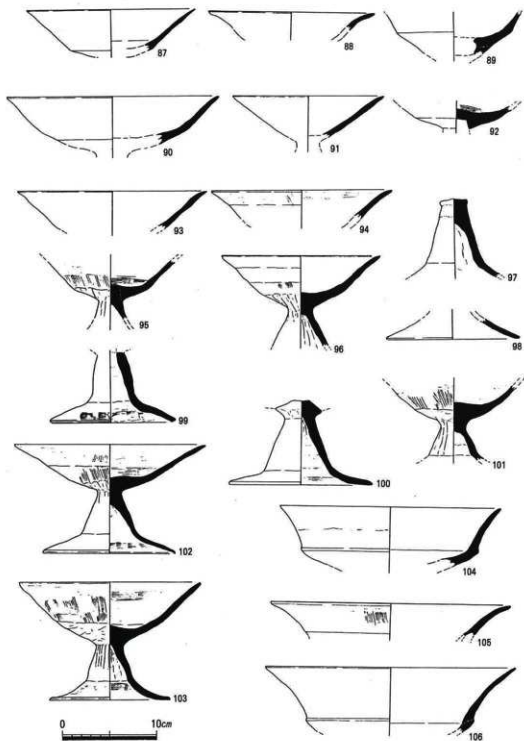
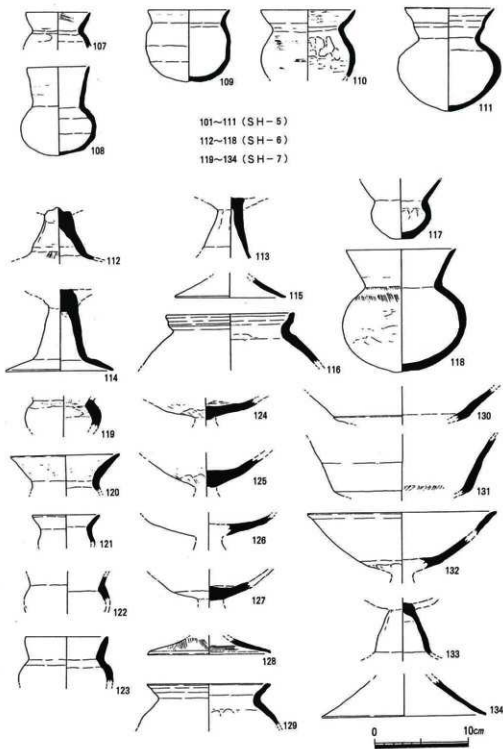


图23 SH-5 土器群出土遺物



101~111 (SH-5)
 112~118 (SH-6)
 119~134 (SH-7)

图24 SH-5, 6, 7 出土遺物

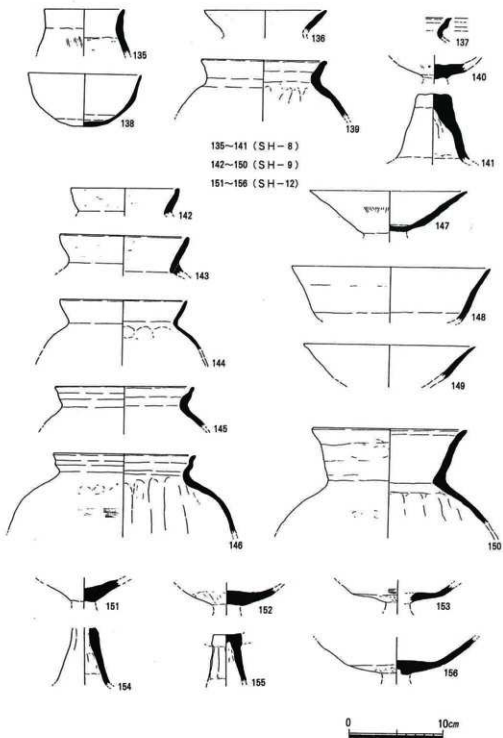


图25 SH-8, 9, 12 出土遺物

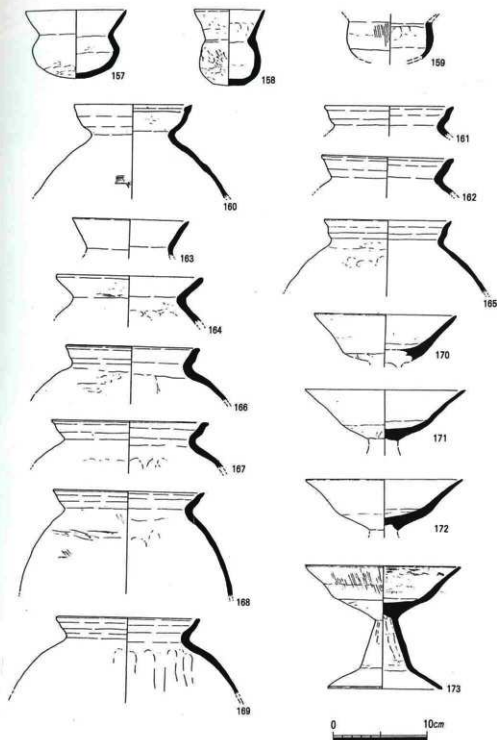


图26 SH-12 出土遺物



1. 調査区全景（東南より西北をみる）



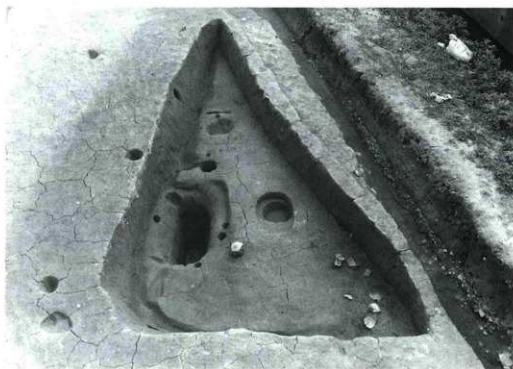
1. 調査区中央より北側地区



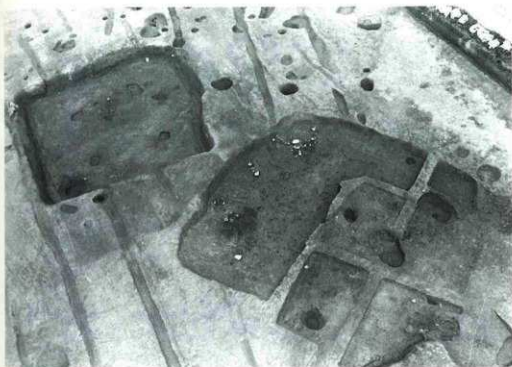
2. 調査区中央より南側地区



1. SH-1 全景（西から東をみる）



2. SH-3 全景（東から西を見る）



1. SH-2, 7, 12 全景



2. SH-1 カマド内土器出土状況



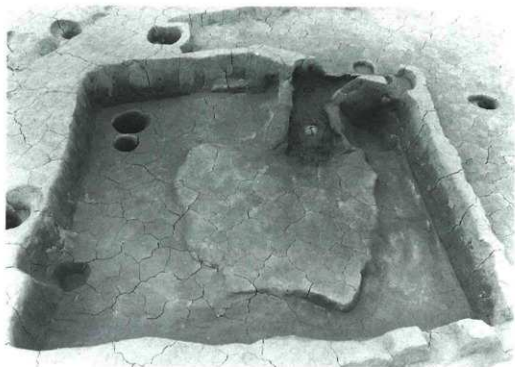
3. SH-7 全景(東から西を見る)



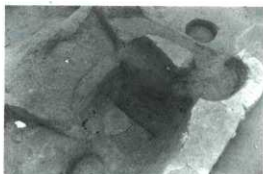
4. SH-2 カマド検出状況



5. SH-2 カマド内土器出土状況



1. SH-4 全景（南から北をみる）



2. SH-4 内土坑・カマド材崩落状況



3. SH-4 全景（東から西をみる）



4. SH-4 カマド煙道部検出状況



5. SH-4 カマド全景



1. SH-4, 5 (東から西をみる)



2. SH-6 東辺砂礫土と土器の検出状況



1. SH-6 内土坑上面出土遺物



2. SH-11 全景（北から南をみる）



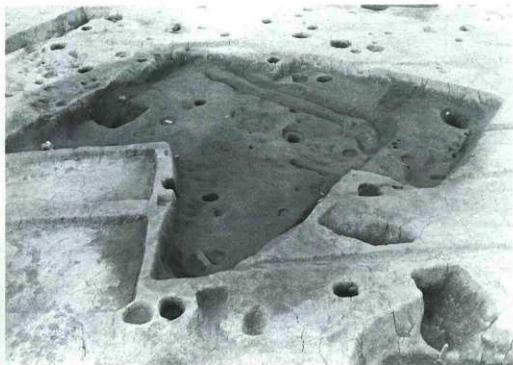
3. SH-6 壁溝検出状況



4. SH-10 全景（東から西をみる）



5. SH-6 全景（北西より南東をみる）



1. SH-8, 9 全景 (南から北をみる)



2. SH-9 壁溝拡張部分



3. SH-8 内土坑とコーナー段状部分



4. SH-8 カマドと小穴検出状況



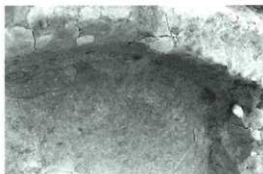
5. SH-9 内土坑



1. SH-12 全景



2. SH-12 床面遺物・炭化材検出状況



3. SH-12北辺壁溝・小穴の検出状況



4. SH-12内土坑の検出と壁材の炭化状況



5. SH-12内土坑と炭化した蓋材



1. SD-2, SB-3 (東から西をみる)



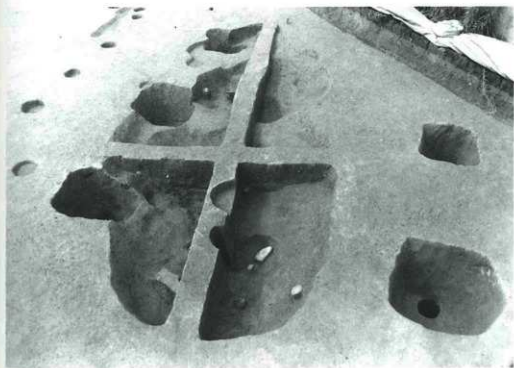
2. SB-2 (東から西をみる)



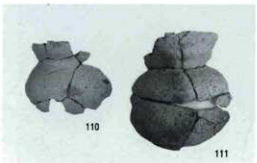
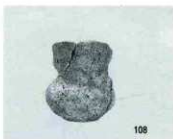
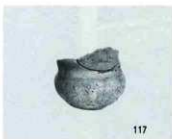
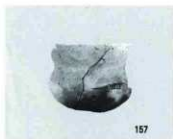
3. SB-1, 旧河道、採掘土坑



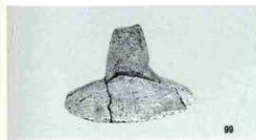
4. SB-4 (北から南をみる)



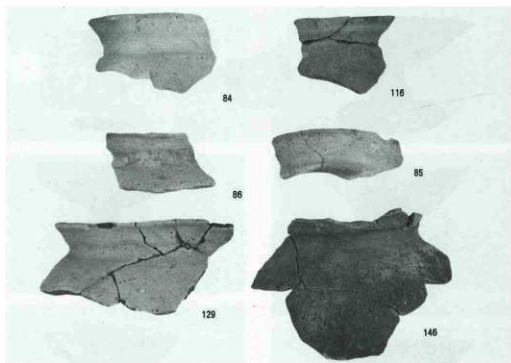
5. SK-10, SB-4 (南より北をみる)



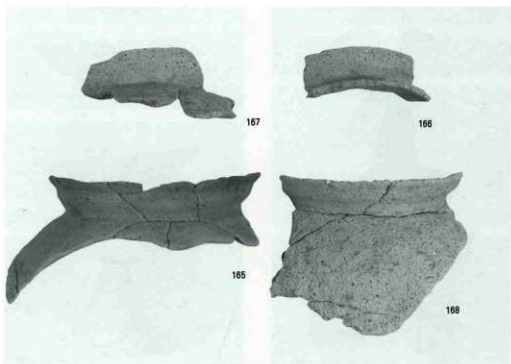
SH-1, 2, 5, 6, 9, 12 出土遺物



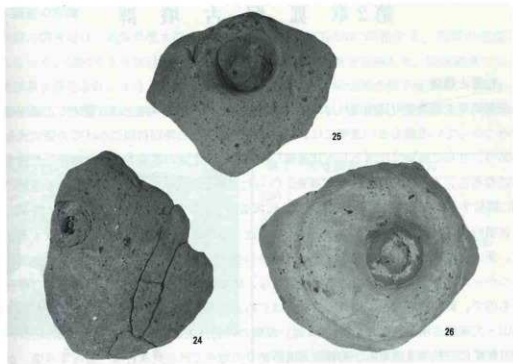
SD-2, SH-1, 4, 5, 12 出土遺物



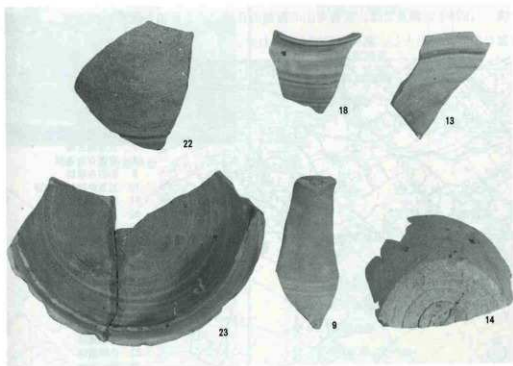
1. SH-5, 6, 9 出土遺物



2. SH-12 出土遺物



1. SH-3 出土高杯（杯底部の脚部接地面）



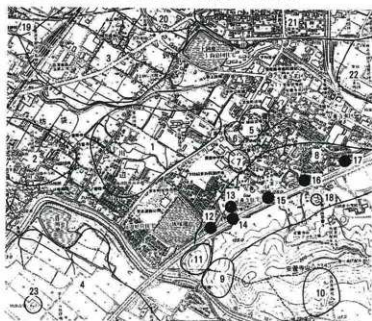
2. SH-2, SK-10, SD-2 出土須恵器

第2章 狐塚古墳群

1. 位置と環境

滋賀県栗太郡栗東町狐塚遺跡は、琵琶湖の南側の野洲川扇状地上に位置する。狐塚遺跡でみつっている最も古い遺構には、縄文時代中期末から後期初頭にかけての竪穴式住居があり、さらに晩期には落とし穴状遺構がみられる。生活の基盤を稲作に移した弥生時代になると、人々はより低温な地に移動していった。弥生時代中期後葉になると狐塚遺跡の北側に隣接する坊袋遺跡で住居が確認され、狐塚遺跡でも弥生時代末の土器が出土している。

古墳時代には野洲川左岸の自然堤防上に、辻・高野・岩畑遺跡の大集落が出現する。また、葉山川流域の中沢・小柿遺跡では流路から多くの古墳時代の遺物が出土し、古墳群もみつっている。この時代を代表する墓域は、狐塚遺跡に東接する安養寺山西麓に存在するもので、新開古墳など、馬具・武器をはじめとする豊富な副葬品を有する山麓の古墳群、椿山・大塚越古墳といった全長100m近い規模の帆立貝式古墳・前方後円墳で構成される。1991年度には狐塚遺跡でも、安養寺古墳群寄りの地点で帆立貝式古墳「狐塚3号墳」がみつかり、「木製埴輪」が出土し、注目を集めた。また、地元にくる古絵図をみると現在確認されている古墳のほかにもう1基存在するものと考えられる。（「けつね塚」・狐塚1号墳）。1993年の調査では、安養寺山の南側の丘陵にある和田古墳群の調査で、6世紀の豊富な副葬品が出土し、墓前祭祀跡もみられた。



- 1 狐塚遺跡
- 2 坊袋遺跡
- 3 上鉤遺跡
- 4 岡遺跡
- 5 椿山古墳
- 6 椿山池ノ浦遺跡
- 7 大塚越古墳
- 8 安養寺古墳群
- 9 和田古墳群
- 10 五百井神社古墳群
- 11 灰塚山古墳群
- 12 下味古墳
- 13 新開2号墳
- 14 新開1号墳
- 15 山寺屋敷古墳
- 16 山ノ上古墳
- 17 毛利古墳
- 18 安養寺遺跡
- 19 下鉤遺跡
- 20 蜂屋遺跡
- 21 手原遺跡
- 22 小野遺跡
- 23 地山古墳

図1 調査周辺図 (1:20,000)

2. 調査の経緯

今回の調査地は、滋賀県栗太郡栗東町大字安養寺7丁目593に所在する。民間の造成工事に伴って、1991年3月26日から6月24日にかけて発掘調査を実施した。現地調査では、古墳群等が発見され、6月8日に現地説明会を実施した。現地調査終了後には、1992年3月31日まで、整理作業を実施した。今回は整理成果のうち、古墳群の概要について報告する。



写1 作業風景



写2 現地説明会



図2 トレンチ位置図

表1 現地調査スケジュール

1991		
3月	26	擁壁部分調査 (トレンチ三辺を幅約5m先行して調査)
4月	16	トレンチ全域調査開始
	23	検出 写真撮影
	24	奈良時代遺構群(溝・柱穴)精査
5月	2	
	3	周溝墓掘削、精査 (SX100,101,103,104)
	20	円墳掘削精査
	21	円墳より埴輪 紡錘車が出土
	22	SX101から勾玉、鉄刀等出土
	25	
	30	
6月	1	記者発表
	4	SX101溝内土壌精査
	5	SX102下層掘削
	6	
	7	写真撮影のためそうじ
	8	全景写真撮影(午後 現地説明会)
	10	Pit完掘など
	11	1/20実測、レベル
	13	遺物とりあげ 撤収

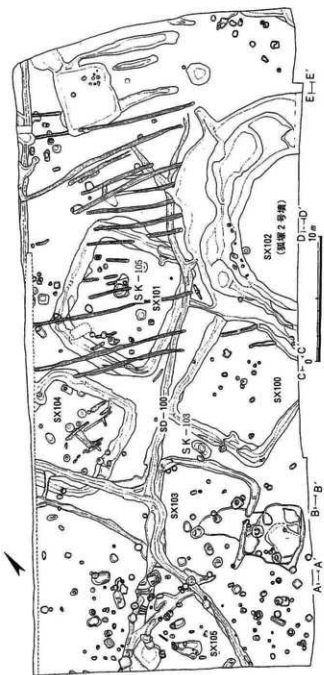


図3 調査地透視図

H=105,200

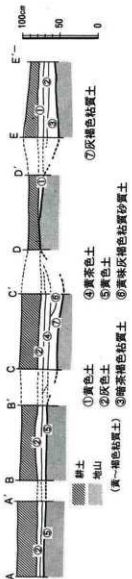


図4 調査地土層図 (S=1/50)

3. 調査の概要

基本土層 調査区周辺は、安養寺山から連なる舌状の微高地の先端部にあたり、調査区内においても、南西側から北東側にかけてなだらかに低くなっている。南西側では耕作土の下が床土（灰～黄色土・層厚15cm）で、以下は明黄色土の遺構ベース面である。調査区西寄りの狐塚2号墳の墳丘は、耕作土直下で検出される。また、その周濠付近は凹みが残っており、床土下に約10cmの灰褐色土の堆積がみられる。トレンチの北東隅では床土下に暗茶褐色粘質土が約10cm堆積し、以下が遺構ベース面となっている。また、丘陵寄りのトレンチ南東側から平地寄りのトレンチ北西側にかけても、遺構ベース面は緩やかに低くなっている。

検出遺構 本調査区で出土した古墳時代の遺構には、円墳（狐塚2号墳）、方墳、土壌がある。白鳳時代～奈良時代の遺構には掘立柱建物、溝、井戸の出土があるが、今回は報告を割愛する。

土壌（SK-103）

遺構 SX-100とSX-103の間にある土壌である。平面プランは不整長楕円形で、長径186cm、短径86cmで、主軸方位は磁北である。断面形は皿状を呈する。埋土は暗灰褐色粘質砂質土で、方墳群の埋土に類似している。遺物は出土していないが、土壌と方墳の位置関係や埋土が類似している状況から、方墳群と同時期のものである可能性がある。

土壌（SK-105）

遺構 SX-101の墳丘部分でみつかった遺構である。平面プランは不整形円で、径85cm、深さ35cmである。埋土は、上層が茶褐色粘質細砂質土、下層は黄灰色粘質微砂質土である。上層から、庄内式併行期の遺物がまとまって出土した。下層からは土器は出土していない。

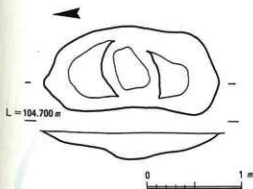


図5 SK103 遺構図

遺物 1, 2は甕である。1は受口状口縁を有するもので、口縁部はナデ、体部はハケ調整である。口径は14.4cmである。2は外傾する口縁を有する甕で、体部は最大径が中位にあり、胴が張る。底部は平底である。外面上半にはハケ調整を、下半はハケの後ナデ調整を行う。体部内面上半はハケの後ナデ、下半は丁寧なナデ調整である。口径は13.6cm、器高は18.3cmである。3は

口頸部が外反する壺で、体部は球形にちかいものである。口縁部には沈線がみられる。体部外面はハケ調整である。口径は14.3cmである。4は、円錐状の高杯脚部である。3方向に円形透孔がある。外面は細かくヘラミガキを行う。5は鉢である。体部は内弯し、底部はやや丸味のある平底である。外面にハケ調整を施す。口径12.4cm、器高7.9cmで、器壁は5~9cmと厚い。

1~5は、庄内式併行期のものである。

古墳(SX-100~105)円墳1基、方墳5基がトレンチ全域から出土した。円墳はトレンチ西側で約半分が検出されている。方墳は円墳と接して緩やかな弧を描くようにして築造されている。相互の切り合いはない。

SX-100

遺構 円墳と接している方墳である。円墳の肩口がSX-100を切っているが、円墳の肩口の堆積土は7~8世紀の遺物を含んでいる層と同一のものであり、両者の明確な新

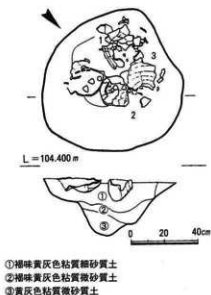


図6 SK105遺構図

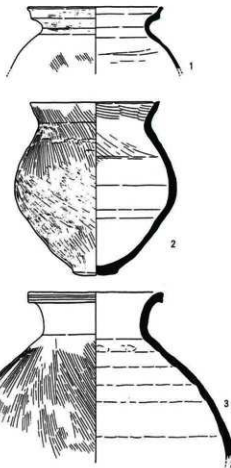
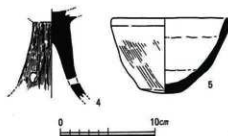


図7 SK105 出土土器

旧関係はわからない。規模は内法で約 $9\text{ m} \times 7.5\text{ m}$ 、周溝の検出幅は $1.8 \sim 0.6\text{ m}$ 、検出面下の深さは $0.35 \sim 0.45\text{ m}$ である。溝底の深さは均一ではなく、特に屈曲部においてやや深くなっている。周溝の土層は、上層が灰褐色粘質砂質土、中層が暗茶褐色粘質砂質土、下層は黄灰色土層である。出土した遺物は、土師器甕・高杯、須恵器等があり、周溝内各地点で出土している。円墳と近接した地点の暗褐色土では、円筒埴輪も出土している。

遺物 6, 7 は受口状口縁甕口縁部片である。庄内式併行期のものである。8 は高杯片である。9 は円筒埴輪片で、台形状のタガを

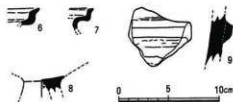


図8 SX100 出土遺物

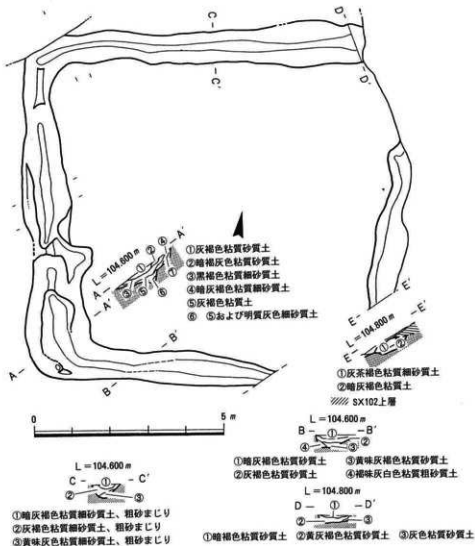


図9 SX100 遺構図

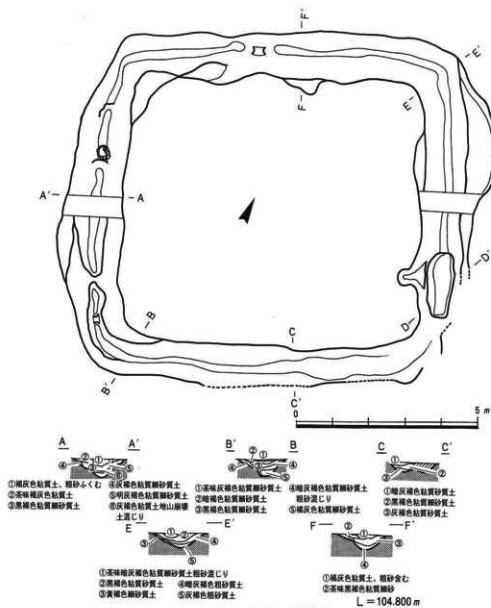


図10 SX101 遺構図

貼り付ける。ヨコハケの痕跡がみられる。

SX-101

遺構 円墳の西側でみつかった方墳である。SD-100に先行する。平面プランは長方形で、規模は長辺8.2m、短辺7.2mである。周溝の断面形はV字状で、検出面からの深さは0.35～0.5mである。埋土は上層が茶味褐色粘質砂質土、中層は黒褐色粘質砂質土、下層は灰褐色粘質砂質土である。南東コーナーの北側に周溝埋土堆積以前の土壌が検出された。土壌は隅丸長方形を呈し、長辺1.78m、短辺約0.65m、埋土は地山よりす

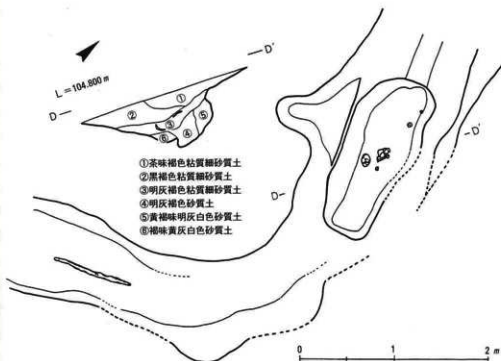


図11 SX-101 玉類、土器、鉄刀出土状況図

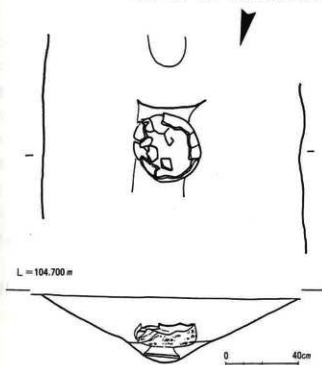


図12 SX-101 須恵器甕出土状況

こし褐色味があるていどの砂質土である。掘り込みの深さは約0.35cmである。土壌内からは、瑪瑙製勾玉、緑泥片岩製紡錘車、溶結凝灰岩製算盤玉、ガラスおよび滑石製小玉が出土し、土壌の埋土の直上からは、土器器甕・高杯が出土した。

周溝の東南コーナーの西側からは、鉄刀が1点出土している。鉄刀は地山近くで出土しているが、土壌状の掘り込みは認められなかった。

西辺の周溝底には、底部を穿孔した須恵器甕が口縁を下

にして、倒置した状態で出土した。ほかに、周溝内からは須恵器片、土師器甕・高杯、円筒埴輪が出土している。周溝検出面からは、布目瓦も出土している。

遺物 10～24は、周溝内の土壌から出土したものである^③。10は、緑泥片岩製紡錘車である。直径4.4cm、厚さ1.3cmで、中央に直径0.8cmの孔をもつ。上面には径2.2cmの平坦面がある。やや内弯している側面には、うず巻き状の曲線文と、直線とを組み合わせた文様を施しており、側面上部には沈線が1条みとめられる。底面は平滑にしあげられており、全体に丁寧なつくりである。11は瑪瑙製勾玉である。半透明の淡赤褐色を呈する。全長3.2cmで、頭部に径0.2cmの孔を穿つ。孔の片面は丁寧に仕上げられるが、もう1方はやや粗雑な仕上げである。そのほかの外表面は平滑に仕上げられている。12は、溶結凝灰岩製算盤玉である。直径2.2cm、厚さは1.75cmを計る。中央よりやや片寄った位置に、径約0.3cmの孔があげられている。淡緑灰色である。13～24はガラス製小玉で、合計21個出土している。発色の状況は、空色のもの、紺色のもの、赤色のものがある。直径は2.5～5.5mm、厚さは1.5～3mmを計る。横断面は丸味を帯びる。ガラス製小玉製作技法についての詳細はP-81橋本氏論考を参照されたい。18～24は滑石製小玉で、合計56個出土している。直径約4mm、厚さ1.5mm程度の偏平なものと、厚さ3mm程度の厚いものがある。偏平なタイプは側面が平坦であり、厚みのあるタイプは側面にふくらみをもち、稜をもつものもある。

25、26は受口状口縁甕の口縁部片である。SX100の墳丘部分にある庄内式併行期の土壌と、同様の時期のものであろう。27～29は土師器高杯である。28は、高杯杯部で、口径12.7cm、深さ3.0cmであり、やや内弯しながらちあがる。脚部は接合部分で剥離して失われている。30は土師器甕である。口径部はやや内弯し、体部は球形にちかい。内面はヘラケズリで調整する。口径は11.3cmを計る。31は須恵器甕である。口縁部は外弯し、端部はシャープで、端部下に凸線を巡らす。体部は肩が張るもので、最大径は体部上位1/3の部分にある。底部はまるく、焼成後に穿孔をしている。穿孔の直径は4.1cmである。調整は外面の肩部が平行タタキのあとヨコナデ、体部下半は平行タタキによる。体部内面は、ナデ調整でしあげられており、肩部にはユビオサエの痕跡がみられる。口縁部はヨコナデである。陶器Ⅰ型式2段階に併行する時期である。

32は鉄刀である。鉄刀は1点のみ出土している。全長89.4cm、刀身長75.2cmの直刀である。X線撮影^④では、茎に目釘穴が認められた。

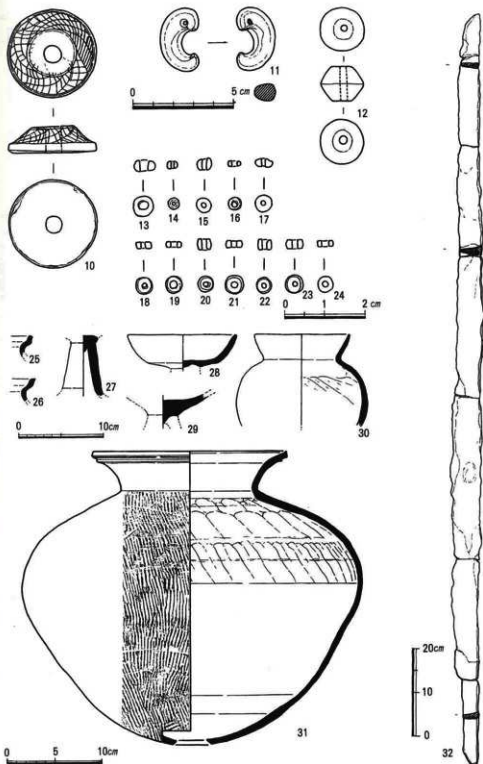


图13 SX101 出土遺物

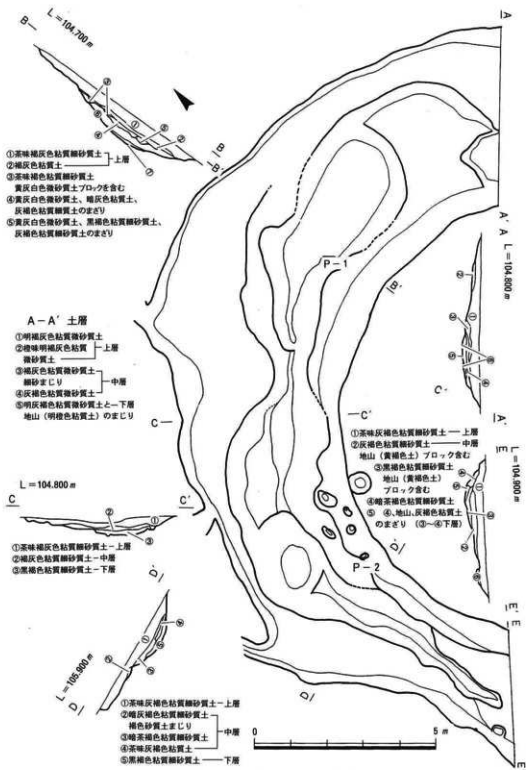


図14 SX102 (狐塚2号墳) 遺構図

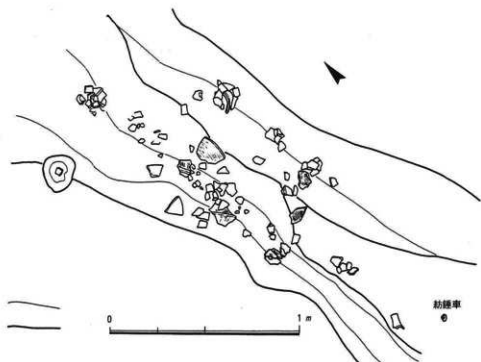


図15 SX102 埴輪出土状況図

SX-102 (狐塚2号墳)

遺構 調査区東南寄りでみつかった円墳である。復元した規模は、径12mである。墳丘は削平をうけている。周濠の幅は、東側で4.7m、南側で3.8mである。周濠は、検出面からの深さが0.5~0.75mで、断面形は墳丘寄りで急な傾斜をもち、底は平らであるが、部分的に凹んでいる箇所が認められる。周濠の外側にかけてはなだらかに上がっている。埋土は上層が茶味灰褐色粘質細砂質土で南側を中心に約0.3m堆積し、奈良時代の遺物が多く含まれており、白鳳~奈良時代の溝(SD-100)とは小溝でつながっている。中層は灰褐色粘質細砂質土で約0.1m堆積し、下層は黒褐色粘質細砂質土で約0.1m堆積している。周濠は南側で方墳

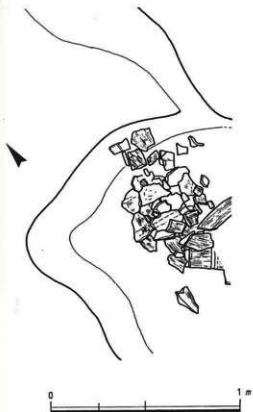


図16 SX102 朝顔形埴輪出土状況図

(SX-100)の東辺と接しているが、両者には後世の土が堆積しているので明確な切り合いは認められない。ただし、円墳は南側においてやや幅が狭くなっているのも、それがSX-100に規制された結果とすれば、SX-102が新しくなる可能性が高い。

周濠の上層には、奈良時代を中心とした時期の遺物が多く出土している。古墳に伴うと考えられる遺物が出土しているのは、中～下層である。埴輪は、いくつかのまとまりをもって墳丘から転落した状態で出土しているが、復元しても完形にちかひものはなく、すでに壊れた状態で転落したらしい。南側の凹み付近では、土師器・須恵器高杯がまとまって出土している。下層からは、ほかに石製紡錘車が1点出土した。

周濠の底には北側に一箇所(P-1)、南側に一箇所(P-2)柱穴が認められるが、周濠のどの層から切り込んでいるかは確認できなかった。柱穴の出土遺物には、P-1のものに須恵器皿、P-2に埴輪片がある。

遺物 33～36は円筒埴輪である。墳丘肩部より周濠肩部にかけて出土したものである。33は口縁部が外反するもので、端部は平らである。復元径は34.0cmである。タガは断面台形で突出度は29とやや低めである。外面調整はタテハケの後をヨコハケで2次調整するもので、1次調整のタテハケはヨコハケに比べて粗い。ヨコハケは5～11本/cmと、一定していないが細かなハケ目である。内面は第1段め中位以下第2段めにかけてタテハケにより、第1段め上位には2次調整としてヨコハケを施す。34は2段め以下が直立し、第1段めはやや外反する。口縁端部は丸味をもつ。タガの断面は台形である。第3段めに楕円形の透孔をもつ。復元径は47.6cmで、器壁は1.0～1.3cm、突出度は33である。外面調整は、1、2段めがタテハケの後ヨコハケで2次調整を施すもので、3段め以下はタテハケのみによる。この調整の変化にともない、ハケの密度も変化しており、第1、2段めは、第3段め以下にくらべ、粗いハケを使用する。内面は第1段めにヨコハケがみられるが、第2段め以下はナデのみで調整している。35は、やや開き気味の体部で、口縁部はやや外反気味で、端部は外傾する面をもっている。口径は約39.8cmに復元することができる。タガは34に類似する断面台形のタイプで、突出度は45である。外面はタテハケのみにより、34同様、第3段め以下は細かいハケを使用している。内面は、第1段めにやや右下りのヨコハケを、第2段めと第3段めの間にもヨコハケを施し、後者は外面と同様細かいハケ目である。36は外面調整をナデのみによるタイプである。直立する体部で、口縁部、底部はともに欠損していて観察することはできない。タガは断面台形を呈するもので、突出度は40である。円形もしくは楕円形の透孔をあけている。外面はタテ方向に丁寧になでており、タガ貼付部分のみ横位の丁寧なナデである。内面は斜め方向に粗くならでている。

37、38は朝顔形埴輪である。37は円筒埴輪34～36と同様大型の埴輪で、外傾気味に直立する体部から、内弯する肩部が内上方にのびる。口縁部は大きく外反し、中位に段をもちタガを貼付け。端部はややゆるいM字状になっている。体部第1段めに楕円形の透孔をあける。タガは断面台形状を呈するが、体部のタガはややゆるいM字状に凹んでいる。体部でのタガの突出度は33である。口縁部径は66.5cm、体部最大径は47.5cmである。口縁外面はタテハケ、肩部および体部第1～2段めはタテハケのちB種ヨコハケを施す。内面は口縁でヨコハケ、体部および肩部にはタテハケがみられる。38は小型のもので、器壁は厚い(約1.1cm)。外面調整は肩部にタテハケがのこるほかは、剥離しており詳細は不明である。内面には一部B種ヨコハケがのこる。タガも失われており不明。楕円形の透孔を有する。

39、40は土師器高杯脚部である。39はゆるやかにひらくもので、裾部径は14.2cmである。40は脚部が段をもって開くもので、裾部径は7.9cmである。円形の透孔が近接し

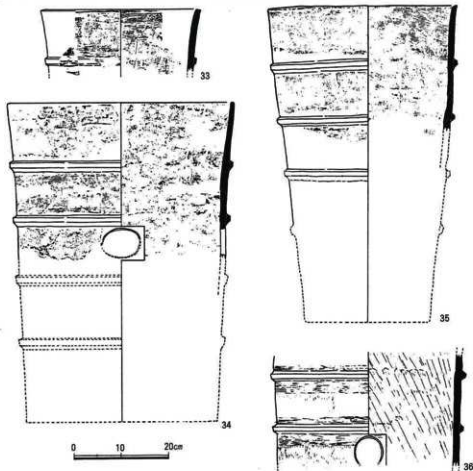


図17 SX102出土円筒埴輪

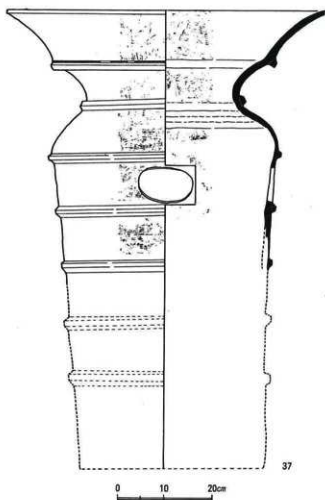


图18 2号墳出土朝顔形埴輪

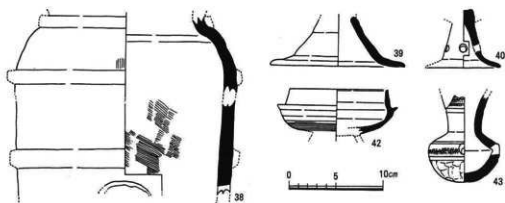


图19 2号墳出土土器

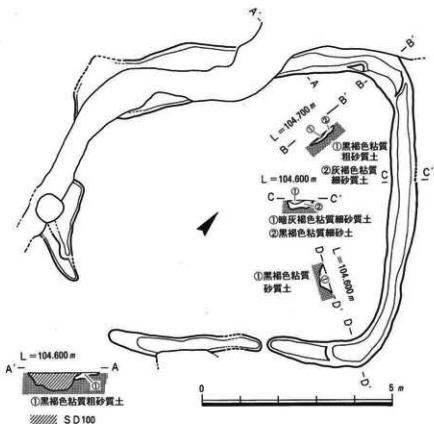


図20 SX103 遺構図

た2方向からあけられる。これと同様の透孔をもつ高杯脚部が、ほかにも2例(図版6, 41)出土している。42は須恵器高杯杯部である。口径10.3cm、杯部の深さは4.1cmである。受部は外上方にやや外弯して立ち上げ、たちあがりは内傾する。外面下半にはカキ目調整を施し、ほかは回転ナデによる。陶邑Ⅰ-3に相当する時期である。43は須傾器甕である。体部は丸く、肩部との間に稜をもつ。基部は稜をもってくびれ、口頸部は外反する。孔の下の沈線より下の外面は、手もちヘラケズリで調整する。陶邑Ⅱ-5に相当する時期である。

SX-103

遺構 SX-100およびSK-2の東隣でみつかった方墳である。SX-100の主軸方向が概ね磁北を示すのに対し、SX-103は、北をやや東にふっている。規模は長辺8m×短辺7mで、幅0.3～0.8mの周溝が巡っている。深さは検出面下約20cmであり、南コーナー部分および南西辺では溝が途切れている。このように、溝の幅や深さから、全体にかなり削平を受けていると考えられる。周溝の断面形は、溝が浅いため、とらえることができなかった。埋土は主に黒褐色粘質砂質土で、SX-100、SX-101

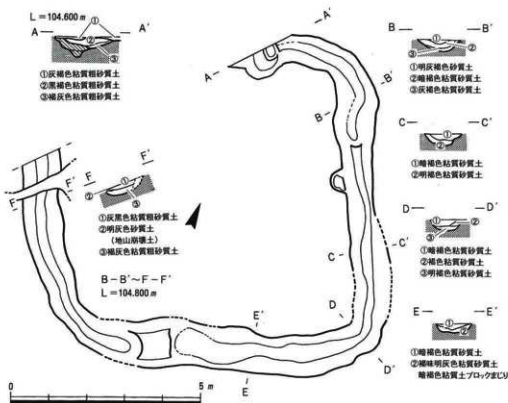


図21 SX104 遺構図

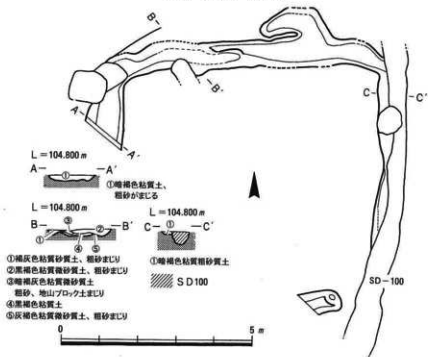


図22 SX105 遺構図

の中層の埋土に類似するものである。白鳳時代には、周溝埋没後の凹みを利用して溝が掘られている。

周溝からは、土師器高杯片、須恵器片が出土している。検出面および上層からは奈良時代の土器が出土している。北コーナーで土師器が集中している箇所がある。

SX-104

遺構 SX-101, SX-103に隣接してみつかった方墳である。軸方位は、北をやや東に振った方位を示す。SD-100および柱穴に切られている。規模は長辺7.5m、短辺6.5mの長方形である。周溝の幅は0.7~1m、断面形は皿状で、検出面からの深さは0.2~0.3mである。埋土は上層が暗褐色粘質砂質土で、下層は明褐色粘質砂質土である。土師器片、須恵器片がみられる。

SX-105

遺構 トレンチ南西寄りでみつかった方墳である。かなり削平を受けていることと、周溝を踏襲するように溝(SD-100)が掘削されていることで、周溝は部分的にしか検出されなかった。規模は、長辺6.5m、短辺6.0mで長方形の方墳である。ほぼ磁北方向を示している。周溝幅は、約0.7~1.0mで、検出面からの深さは約0.1cmである。埋土は暗褐色粘質土である。遺物は、周溝に後世の遺構が重複する部分が多いため、ほとんど出土していない。

注、参考文献

注① 『東東町埋蔵文化財調査 1991年度 年報Ⅱ—下鉤・狐塚・上鉤遺跡—』 東東町文化体育振興事業団 1993

注② 『安養寺共有文書』

注③ SX101出土の玉類の石材については、奈良国立文化財研究所、肥塚隆保氏の御教示による。

注④ 奈良大学、および橋本奈保子氏の御協力による。

注⑤ 天野末喜・松村隆文 『埴輪の種類と編年 円筒埴輪—近畿』『古墳時代の研究 9 古墳Ⅳ 埴輪』雄山閣 1992

「タガの器壁からの高さを器壁との接合部の幅で除し、100を乗じて得た数字」を、タガの突出度としている。

注⑥ 狐塚3号墳と同様(前掲注①)、2号墳の埴輪は底部がほとんど出土していないため、円筒埴輪等の部位については、

口縁部を第1段め、以下第2段め、第3段め…と呼称することとする。

3. 小結

栗太郎栗東町大字安養寺には、「狐塚」という小字名があり、これが狐塚遺跡の名称の由来となっている。この小字名は安養寺共有文書にみられる「けつね塚」（狐塚1号墳）によるものである。近年、この狐塚周辺地区の調査例も蓄積され、じょじょに狐塚1号墳の周辺に広がる古墳群の実態が明らかになりつつある。今回整理・報告を行った地区からは、円墳1基（狐塚2号墳）が見つかった。以下2号墳を中心に若干まとめることとする。

狐塚古墳群で、埴輪がまともに出土しているのは、2号墳および、3号墳（全長32mの帆立貝式古墳）である。3号墳との比較において、2号墳について考えると、まずタガの形態では、3号墳ではa～f類といったものがあり、なかでも低平なa～d類が主体で、突出度の平均は25と小さい。2号墳ではc, e, f類があり、突出度の平均は45と高くなっている。次に口縁部の形態については、3号墳では図のイ～ハ類がみられたが、口類は須恵質のものが中心でやや鋭い端部となっており、2号墳ではみられない。2号墳ではイ、口類および端部に外傾する面をもつ二類がみられる。

次に調整についてみると、2号墳ではB種ヨコハケによるもの、タテハケによるもの、1次調整のタテハケの後、B種ヨコハケによる二次調整をしたことが明瞭にのこるものの大きく3種類に分けられる。タガ突出度との関連については、タテハケによるものがタガ突出度も低い傾向にある。ただし乳白色系の埴輪のなかにタガの突出するものがある。これに対し、ヨコハケを施すものは、タガ接合部の幅にはバラつきがみられるものの、タガ



図 2号墳、3号墳のタガの形態（a～f）、口縁部の形態（イ～ニ）

表2 狐塚2号墳出土円筒埴輪 タガ突出度

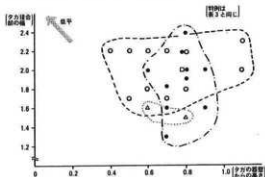
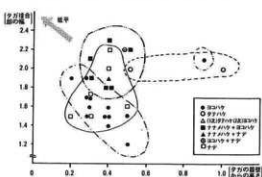


表3 狐塚3号墳出土円筒埴輪 タガ突出度



の器壁からの高さはある程度一定して高い。このことについて、3号墳と比較してみるとヨコハケのものはタガの器壁からの高さは低く、しかもタガ接合部の幅は狭いものに集中するようである。ハケの方向を段ごとに変えたり、ハケとナデを組み合わせているものは、タガの器壁からの高さは低く、しかもタガ接合部の幅がひろいので、突出度としてはもっとも小さいもののグループとなる。ナデのみによるものは前二者の中間にある。ヨコハケのもの、およびタテハケのものに、タガの器壁からの高さが高いものがある。

焼成についてみると3号墳では須恵質のものがみられた。これに対して2号墳では、やや硬質で赤色系を呈するものと、軟質で乳白色系のものがある。

以上を総合すると、2号墳の埴輪はタガの突出度が大きく、調整のバラエティはすくない。これと比べて3号墳ではタガの突出度が小さく、調整および焼成の度合についてバラエティに富んでいることがわかる。このことについてはB種ヨコハケという同じ調整手法を有するもので比較することができる。

2号墳の年代については、周濠より出土した須恵器、土師器が手がかりとすることができよう。周濠出土の須恵器高杯は、土師器高杯とともに1ヶ所にまとまって出土（図19-39～42）しており、限定された器種であることも含めて、古墳祭祀に関わる遺物である可能性があり、遺物の年代を古墳の年代の手がかりとすることができると考えられる。この須恵器高杯は、陶邑I型式3段階に相当する時期である。なお、遼（43）は時期の降ものであるが周濠内Pitから出土しているもので、周濠堆積後のものであると考えられる。2号墳の年代は5世紀中頃～後半と考えられる。

3号墳の年代については、出土した土師器や共存した木製品、およびこれに埴輪の年代を加味し5世紀から6世紀初頭という年代を与えているが、埴輪の年代については調整手法や古墳の規模との関係についてなお検討の余地を残している。

ここで、2号墳と3号墳について、その埴輪を比較してみると、タガの低平化という点では、2号墳→3号墳という変遷が明確に表れている。調整については3号墳においてよりバラエティがみられるものの、ナデのみの調整が多いことから簡略化がすすんでいることをみることができる。これに対して2号墳では2次調整のヨコハケがみられるなど、3号墳との差異は明瞭である。焼成については、3号墳で須恵質のものが出現している。埴輪の大きさについては、3号墳において、小型のものに限られていたのに対し、2号墳では口径40cm程度のものと、20cm程度のものが存在する。

3号墳においてみられた、調整や焼成の度合のバラエティについては、時期的な簡略化の傾向、および供給元の多様性を示すものと考えられる。その背景には古墳の形・規模に表出される被葬者の格差にも関連性がある。また、このバラエティゆえに、当該期の古

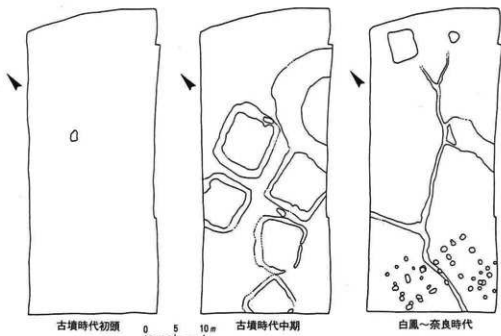


図 狐塚遺跡遺構変遷図



図 狐塚2号墳周辺図 (1:5,000)

墳の時期を少量の埴輪片から推定するのは難しい。詳細なデータにより調整、焼成、口径、出土古墳の形・規模などの関連を考える必要がある。

2号墳を考える上では、隣接する椿山古墳との関連を考えるべきであろう。椿山古墳は狐塚2号墳の南東約100mの地点に存在する。全長99m、県下最大の帆立貝式古墳であり、三角板革綴短甲、鉄剣、鉄鍬などが出土している。周濠推定ラインとなっている北東側の弧を描く道路部分の調査では、円筒埴輪が出土している。この円筒埴輪片には赤色系で軟質のものとやや硬質のものがあり、硬質のものにはタガを挟んでタテハケとヨコハケがみられる。タガは剥離している。軟質のものは、磨滅しており、調整は不明であるが、タガは幅2.1cm、器壁からの高さ0.7cmと2号墳のものと同程度である。胎土は2号墳のものより粗い。椿山古墳の推定周濠部分の北に隣接する地点では、埴輪、高杯形器台が出土している。埴輪はF類のタガとヨコハケを施すもので、高杯形器台は組紐文を有するものである。これらは椿山古墳と密接に関わるものとされる。これらの点から、椿山古墳は須恵器出現期に年代の一端を想定することができよう。

狐塚2号墳周辺では、円墳に先行して方墳群、すくなくとも2基(SX100, 101)は築造されていたとすることができる。SX100に周濠プランの規制をうけ、SX101よりもやや新しい様相をもつ須恵器をもつ2号墳は、これらの方墳群に継続して築造されたとすることができる。SX101には、溝内埋葬を伴う可能性があり、方墳内部における階層差が存在する。さらに円墳との比較においては、周濠・周溝の形態の差異、およびこれによる墳丘の高さの差異、埴輪の有無といった点で、2号墳は優位にたつものである。これらの中小古墳群は、椿山古墳よりややおくれ、ひきつづき築造されていったものと考えられ、椿山古墳被葬者と密接にかかわり、身分の格差をもつ人たちの墓であった可能性が高い。土壇墓、周溝内埋葬、低墳丘の古墳、高い墳丘をもつ古墳、首長墓と、その序列をおうことができる資料であるといえる。

参考文献

- 大崎隆志 「近江栗太郡安養寺古墳群についての二・三の検討」『滋賀考古』第7号 滋賀考古学研究会 1992
- 大橋信弥 「豪族の世紀」『東東の歴史』第1巻 古代・中世編 栗東町史編さん委員会 1988
- 川西宏幸 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会 1978
- 中村 浩 『和泉陶器の研究』柏書房 1981
- 『1990年度 年報』財栗東町文化体育振興事業団 1991
- 『1991年度 年報Ⅱ』 1993



古墳群全景



SX101 全景



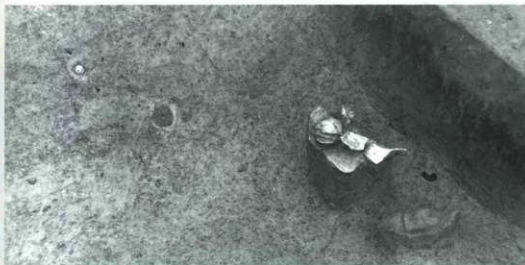
SK-105 土器出土状況



SX101 須恵器甕出土状況



SX-101 鉄刀出土状況



SX-101 溝内土壌遺物出土状況

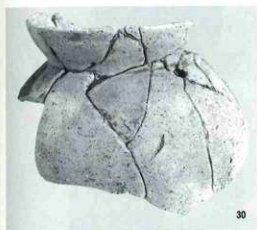
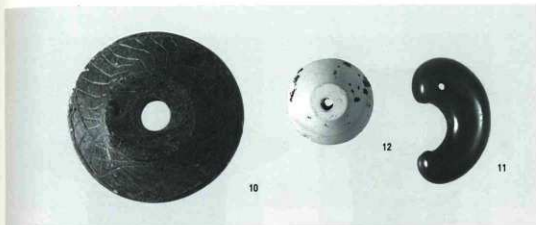
2号墳埴輪出土状況



2号墳遺物出土状況



2号墳周濠土層





35



34



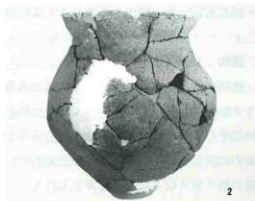
37



33



36



付 論 ガラス小玉製作技法

橋 本 奈 保 子

1991年狐塚遺跡の発掘調査によって古墳時代中期の円墳1基、方墳5基が発見された。この中でもSX-101と名付けられた方墳からは土器とともに紡錘車、算盤玉、瑪瑙製勾玉、ガラス製または滑石製小玉、鉄刀が出土している。SX-101は7.2×8.2mの大きさで、1.5m幅、V字断面の周溝を巡らす。ガラス小玉の出土はこの周溝にかかる1.7×0.8mの掘込み部分からであった。今回このガラス小玉の一部を拡大、観察しその報告をするものである。

製作技法

古墳時代におけるガラス小玉の製作技術についてはいくつかの方法が想定されており、またそれらが同時に複合的に行われていたものと考えられる。

1. 「吹き」「引き」と呼ばれるもので、ガラスを管状に長くのばし、これらを切断して破断面を整形しなおす。
2. 「巻き付け」は細かい金属の棒に離型剤として粘土を巻き、ここにガラスを加熱してやわらかくしたものを巻き付け、一つずつ成形するものである。
3. 「鋳造」ガラス製勾玉の鋳型は弥生時代のものも含めて数例が報告されている。また奈良県布留遺跡からは当該期のガラス丸玉の粘土製鋳型が出土している。時代は下がって平城京左京一条三坊出土のガラス小玉の鋳型の報告もあり、今後類例の増加が期待される。

遺物 ガラス小玉A

透明な青色をした直径4mmの小玉である。製作技法の1によるものと思われ、管状にガラスを伸ばした縦方向に沿って細かな筋が走っているのが確認できる。ガラス小玉の切断面は平らでやや横方向に膨れた形を見ると、切断後可塑性のある軟らかさのうちに平らなものに押しあてて成形したものであろう。小玉の穴は滑らかではほぼ垂直に落ちており金属製の棒を抜き取ったあとと考えられる。

ガラス小玉B

不透明黄緑色、直径4mmの小玉、Aとは反対方向の横向きに筋が見られることと、巻き終わりと思われる接続部分が見られることから技法の2によるものと推定している。穴の部分は当て具による成形がなされている。断面を見ると八角形となるようにきっちりと角を取っている。しかし穴の形はゆがみを生じている。

ガラス小玉C

透明で薄い青色をした小玉、直径3.2～4mmの不定形、出土したガラス小玉の中では目立って変形したものである。表面にはAと同じように平らに刀をかけた成形のあとがあり、かつ中心部分の穴はほぼ円形をしている。成形の際に温度の関係で形が崩れたものであろうか。また小玉は一部分が細くなっており、ここが接着点になっているか、成形の失敗かは確定できないが、少なくとも技法の1を用いてはでき得ない形となっている。

しかしこの小玉にはさらに穴の内側にガラスの飛び出した部分という成形ミスがある。

この飛び出し部分は中が空洞のわけではなく、加熱の時にできる可能性のある気泡の育ったものではない。技法1, 2の場合はガラスから金属棒を抜くという作業があるため内側にこのような飛び出しが残るとは考えられない。これは鋳型成形特有の産物(金型成形では「バリ」と呼ばれる型からはみ出した部分)の可能性が高い。消去法的帰結ながらこの小玉は技法3によるものとしたい。

小 結

一括出土のガラス小玉に「吹き」「巻き付け」「鋳造」という3種の技法が混在する可能性がでてきた。生産から流通、消費という古墳時代における一連の物の流れは、ガラス製品に限らず解明されているわけではない。ガラス小玉の製作は材料の入手を別にすれば、当時の技術水準からして困難なものであるとは思えない。従ってガラス工房が孤塚遺跡からさほど遠くない場所に作られこれらを供給したと考えるのが妥当であろう。そこに異なった技術をもった職人が集合していたのか、また今回の成分分析を実施していないので断言しかねるが、ガラスの質によって技法を変えるものなのかも検討せねばならない。肉眼では「吹き」のガラスは透明で、「巻き付け」は不透明で不純物が多い、「鋳造」は透明度は低く不純物を含む、という具合に違いがある。さらに土器などの製作について昨今言われるように技法、文様で製作集団が特定できるという考えを借りるならば、3つの工房から別個に製品を供給されたことになる。こう考えると背後には確立した流通系の存在が想定できることとなる。

参考文献

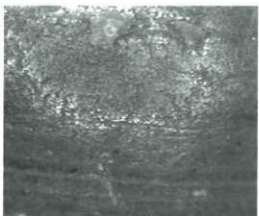
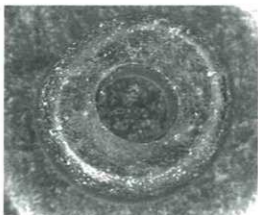
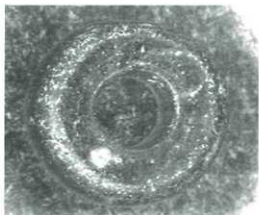
関川尚功『玉とガラス』『古墳時代の研究』5、生産と流通Ⅱ 雄山閣出版 1991

潮見 浩『図解 技術の考古学』有斐閣 1998

『埋蔵文化財発掘調査1991年度年報』財団法人栗東町文化体育振興事業団 1992

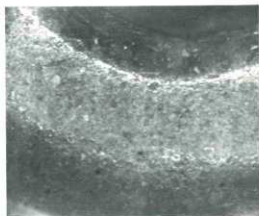
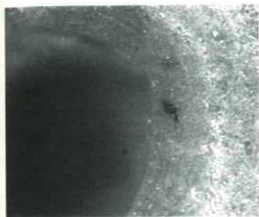
図版 1

ガラス小玉 A (×50)

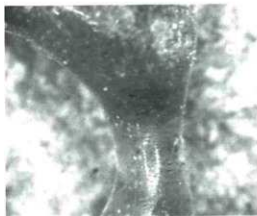
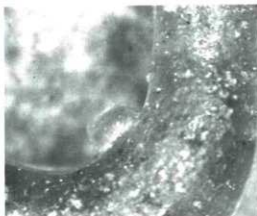
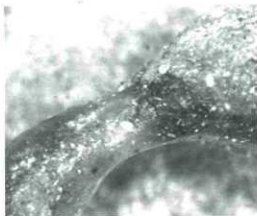
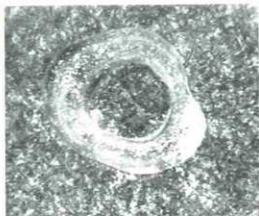


接続部分

図版 2



ガラス小玉C (左上は×50 あとは×200)



飛び出し部分が確認できる

第3章 山田窯跡

1. 位置と環境

山田窯跡は、滋賀県栗太郡栗東町大字狐ヶ谷に所在する7世紀中葉から後葉の瓦陶兼業の窯跡群である。窯跡は分布調査により、丘陵地の谷を挟んだ両側斜面に10基の存在が確認されていた。今回の報告は、そのうち狐ヶ谷318-2に所在する半壊した窯跡1基（A-1号窯）の調査報告で、調査面積は約40㎡である。

栗東町は琵琶湖に面するいわゆる湖南平野の南東端に位置し、沖積地・丘陵地・山地を町域に有している。山田窯跡群は、その丘陵地に存在し、金勝川中流域に形成された谷底平野からさらに奥へ入る小支谷の斜面に分布している。この丘陵地は、約500万年前～約30万年前の地殻変動で誕生した古琵琶湖に土砂が堆積し、その後隆起したといわれる古琵琶湖層から成り、その堆積層は、礫・シルト・粘土・火山灰などで構成されている^①。古琵琶湖層から成り、その堆積層は、礫・シルト・粘土・火山灰などで構成されている^②。古琵琶湖層から成り、その堆積層は、礫・シルト・粘土・火山灰などで構成されている^③。

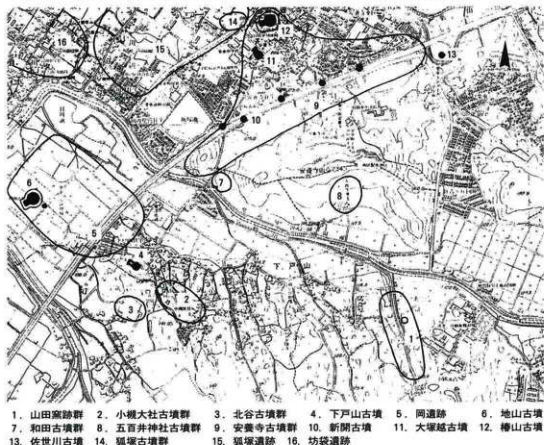


図1 調査地周辺の遺跡分布図 (S = 1 : 20,000)

琵琶湖層の丘陵地は、粘土と水、そして木材を容易に得ることができ、登窯を構築するのに適し、また、主な消費地である沖積地に近いことから湖南地方の古代窯跡群は、沖積地周辺の丘陵地に集中して分布している。

7世紀の山田窯跡周辺の遺跡を概観してみると、金勝川上流約1.4kmの上砥山に存在する中村遺跡で7世紀代の竪穴式住居跡9棟が出土しており、その遺跡を望む丘陵には横穴式石室に家形石棺を有する円墳（径15m）龍王古墳が存在し、7世紀前半の遺物が出土している。一方、東へ約1.6kmには栗太郡衙跡の岡遺跡が存在する。岡遺跡では7世紀前半の方墳、6世紀から7世紀中頃の竪穴式住居6棟が出土している。またこれに続く7世紀後半は、官衙の成立期である。そして北方約2kmには白鳳寺院や奈良時代の官衙跡の存在

が推定される手原遺跡が存在する。さらに手原遺跡の北西0.8kmには蜂屋寺跡推定地の蜂屋遺跡があり、ともに白鳳期の瓦を多量に出土する遺跡である。

窯跡群の所在する下戸山には、小槻大社と五百井神社の両式内社が鎮座、そのうち、小槻大社は古代豪族小槻山君の祖神を祀る。小槻氏は、栗太郡内において大きな勢力を持っていた豪族で、栗太郡の郡司も小槻氏と推定されている。山田窯跡群は、これら周辺地域の官衙や寺院、有力豪族との強い関わりの中で成立したものと考えられる。



図2 調査地位置図 (S = 1 : 5,000)

2. 調査に至る経過

(1) 山田窯跡は、『滋賀県史蹟名勝天然記念物概要』(1936)^①に「下戸山窯址」として紹介され、そののち1971年・1972年に滋賀県教育委員会によって実施された分布調査によって再確認されている。ここでは、窯跡群を便宜的にA～Dの4支群に分けた、なお本調査の窯はA-1号窯とする。1978年には丸山竜平氏が『滋賀文化財だより』に、「栗東町下戸山山田蛭子講南古窯址について」^②と題して、論考を発表された。丸山氏は、窯跡群を谷を挟んで北古窯址群(図2・B)と南古窯址群(C)に分け、南古窯址の灰原から採集した遺物について詳細な検討を加えている。これらの遺物は、A-1号窯の遺物と同時期と思われる須恵器杯身、杯蓋・甕であるが、平瓦は凸面に格子叩きの認められるもので、本報告の縄目叩きの平瓦とは異なっている。また、近藤広氏は、C支群A-1号窯採集遺物にゴルフ場入口付近(D)採集の遺物を加え考察を行った。^③さらに、「金勝周辺の古窯址群と岡遺跡」で山田窯に続く、辻越窯等への窯の移動や供給地との関係を岡遺跡の調査成果を踏まえ論述している。^④

なお、窯跡群の所在するのは下戸山字狐ヶ谷であり、小字山田は狐ヶ谷の西側丘陵にあたるので山田窯という名称は適しているとは云えないが、これまでの経過と研究史を尊重し、混乱を避けるためにも山田窯の名称を継続して使用したい。(佐伯英樹)

(2) 1981年、本調査地の造成工事が計画され、これに先立ち埋蔵文化財確認調査の依頼が栗東町教育委員会に提出された。本調査地一帯には、滋賀県遺跡目録や丸山竜平氏の報告によって周知されていた山田遺跡(窯跡群)が存する。このため、踏査後一部表層土を除き遺構確認作業を実施したところ、窯跡一基の遺存が確認された。

その後、本窯跡の保存・調査について土地所有者と協議をはかったが、その扱いについて合意を得るに至らなかった。

1983年に至り、開始された搬入路工事によって窯跡の一部が削平され、再度協議を進めたが、これによって土地所有者の理解が得られ、窯跡部分の借地契約を締結し、保護施設(擁壁等)の設置を行った。この工事に際しては、(財)滋賀県文化財保護協会中川正人氏の御指導を受け、窯体表面の樹脂塗付を施した後、埋め戻した。

以降長らく借地契約の更新を重ねたが、1991年、所有者の土地利用計画によって契約解除の強い要請があり、その扱いを協議したが、所有者の意向は変わらず、借地契約の解除、発掘調査の実施に至った。(清水好洋)

調査日誌（1992年1月13日～2月28日）

1月13日（晴）調査開始。下草刈り。レベル基準設定。ユニットハウス・トイレ設置。

14日（曇時々雨）下草刈り。レベル基準設定。窯体保護の盛土を除去。

16日（晴）窯体保護の盛土除去作業終了。

17日（晴）窯体保護のビニールシートと盛土を除去。

18日（晴）窯体検出、検出状況写真撮影。

20日（曇）窯体検出状況の平板測量図作成（ $S=1:50$ ）

21日（晴）窯体掘り込み開始。灰原推定位置をトレンチ掘り。

22日（晴）窯体内から遺物が出土し始める。現地説明会を2月8日に決める。

23日（晴）縦方向断面写真撮影、断面図作成（ $S=1:10$ ）

24日（晴）断面図実測及び灰原推定位置トレンチ掘り。

29日（曇）横方向断面写真撮影。断面図作成。

30日（曇）断面図実測終了。

31日（曇のち雨）遺物検出作業。

2月4日（晴）遺物検出作業。

5日（晴）窯体内遺物出土状況写真撮影。

記者発表。

6日（晴）現地に記者発表。（取材）

7日（晴）平面割り付け。

8日（曇のち雪）現地説明会（文化財講座）

現地説明会風景

開催。90名参加。

12日（晴）遺物検出状況実測図作成。

13日（晴）遺物取り上げ。

14日（曇時々あられ）遺物取り上げ。道部分トレンチ掘り。

18日（曇）19日（曇時々あられ）窯体内掘り下げ。

20日（曇）道部分トレンチ断面図作成（ $S=1:20$ ）

21日（曇時々雪）窯体内完掘。

25日（雪時々曇）完掘状況写真撮影。

26日 完掘状況実測図作成（ $S=1:20$ ）

27日 レベル入れ。遺跡周辺分布調査。

28日 平板で窯体内の等高線を測量。

作業道具等撤去。現地調査終了。



調査参加者

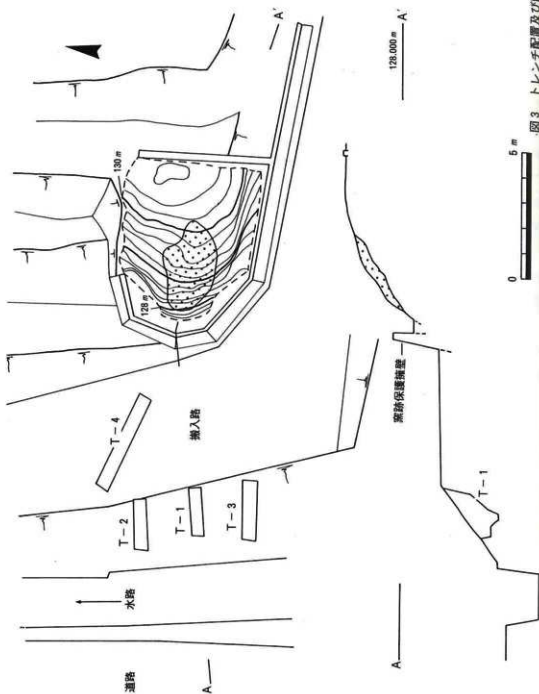


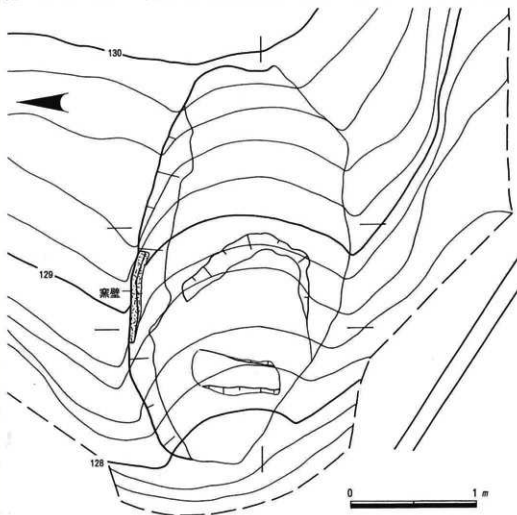
図3 トレンチ配置及び断面図

3. 調査の概要

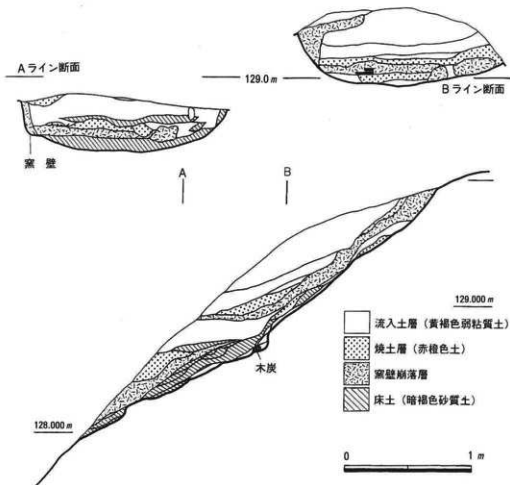
(1)トレンチの配置 窯は搬入路工事の際に大きく削平を受けており、その残存部分は、焼成部の上半部3 m程であった。また、斜めに削られているため、窯の中心ラインの判定に苦しんだが、縦方向中心ラインと横方向2ヶ所の3方向に断面観察用のアゼを設け、掘り込みを行った。搬入路部分は、窯体の残存する可能性があるため第4トレンチを設定。搬入路から水路への斜面は灰原の存在を確認するため第1～3トレンチを設定した。(図3)

(2)遺構

第1トレンチ(T-1) 搬入路から水路へ下る斜面の最高所から約2 m掘り下げた標高124.2 m地点で地山を検出した。攪乱されており遺構等は残存しない。腐植土や地山の黄色土に混じて焼土や須恵器、瓦等の小片が出土した。第2・3トレンチも同様な状況



第4図 窯 平面図



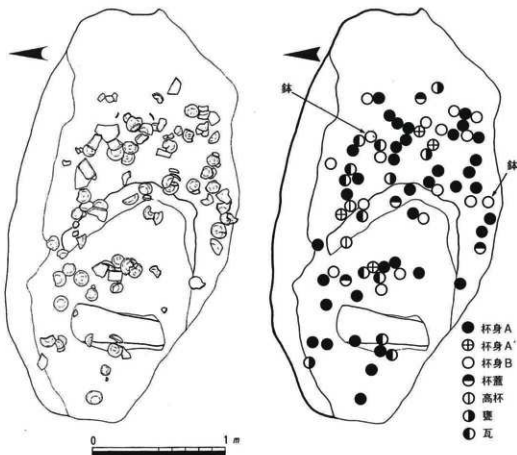
第5図 窯 断面図

であった。

第4トレンチ(T-4)標高 125.7m~124.8mで地山を確認した。攪乱を受けている。窯壁片や須恵器・瓦の小破片の出土をみた。なお、T-4は窯体中央ラインからややずれて設定しているが、この状況から搬入路部分の遺構は、完全に破壊されているとみられる。

窯体 焼成部の上半部のみが残存していた。窯の残存規模は長さ3m、床面最大幅1.5mで、側壁は床から0.4m残存していた。窯体内には側壁や天井から崩落した大小の窯壁塊がみられた。床は面として3面確認できた。窯構築時の床(第1面)は地山を削りだして作られている。128.2mライン付近で地山を削り残して作られた階段状の部分があり、128.6m~128.8m付近で段差がみられ、その上部は傾斜がきつくなっている。第2面は、その直上によくしまった砂質土により床が作られているが階段状には作られていない。断面の観察により、第2面は数度にわたる補修痕跡が見られた。また、この床には、置き台

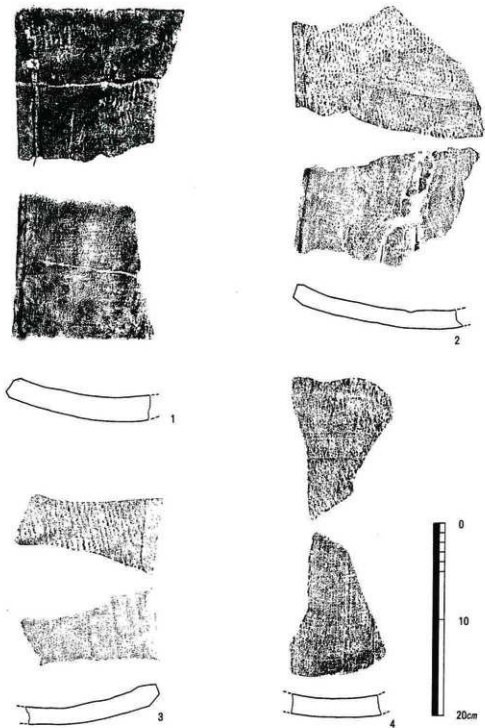
に使われていたと考えられる数点の須恵器が埋め込まれていた。第3面は、天井や壁から剥がれ落ちたと思われる細かい窯壁の層と焼土層の上に、第2面と同様の砂質土を貼り作られている。この面は傾斜がゆるいので段をもっていった可能性があるが、検出が小範囲であったため、詳細は不明である。窯体内には大小さまざまな窯壁塊がみとめられたが、それらを観察すると4回の補修痕跡が認められた。窯体の残存は劣悪であったが、これを窯体の上半部と判断したのは、上部に向かって左側の側壁が中央ラインに寄っていくことと、床面中央付近で傾斜角度が急にきつくなっていることなどから煙道にかなり近い部分と考えた。また、最上部の床面（地山）には炭素が付着して黒色を呈していた。



第6図 遺物出土状況実測図・配置図

4. 出土遺物

遺物は主に、窯体第2床面及び床に埋め込まれた状態で出土した。平瓦と須恵器の杯身・杯蓋・高杯・甕・鉢・甎である。T-1～4、及び1981年の窯体確認時にも少量の遺物が出土している。復元、実測可能なものはできる限り図化するように努めた。



第7圖 平瓦拓影



第8図 平瓦拓影(2)

平瓦(図7, 8) 還元炎焼成により灰色を呈した平瓦で、粘土板桶巻作りである。凸面はナデを施しているが不完全なため、すべてに縄目叩き痕がみられる。凹面は布目・桶状具の板の継ぎ目(模骨痕)がみられ、その板の幅は約3~3.5cmを測る。1, 5には狭・広端部がみられるが、完形品が無いいためその区別は難しい。端部は側面同様凹凸面両側に面取りが施されている。2は、桶に巻かれた布の継ぎ目で布がみだれ、粘土が直接板にあたっている部分がある。8は平瓦の破片を円形に加工した置き台であろう。

甕(図9) 甕体部の破片で、外面の調整は1, 2が平行叩きのみで、他は平行叩きの上からカキ目を施す。内面は同心円の当具痕を残す。甕の口縁部は1点のみの出土である。(図14-96)。

杯身(図11, 12, 13) 器形からA・B・Cの3タイプに大別される。杯の底部はヘラおこし後、未調整のものと不整方向にナデ調整するものがある。ロクロ回転方向はすべて右回りである。胎土は密で、色調は白灰色から暗灰色を呈す。

Aタイプ 底部から体部、体部から口縁部への境に明瞭な段を有し、口縁を強くナデる



ためその端部が外反する特徴がある。



A2タイプ Aタイプに近いもので、それぞれ別の特徴を有するものをA2タイプとした。(56)は口径が小さく、底部が丸い。(57)は器壁が2.5mm前後と薄く、ナデによる稜線もゆるやかである。(58)は稜がゆるやかで口縁が外反しない。(59)口径が広く器高が低い。



Cタイプ 底部が大きく、器壁も厚い。見込み部の調整はA・Bの回転ナデに対し、不整方向のナデを施す。碗の様な器形である。2点のみ出土。



Bタイプ 底部は平坦で逆八の字型に体部がのびる。口縁はやや外反するものがある。量的にはAタイプよ



第9図 甕拓影

り少ないが小破片の多さを考慮するとそれほど差はないと思われる。

杯蓋（図14-80-89）杯身に比べ出土数は少ない。宝珠型のつまみが付き、口縁部内面のかえりは比較的鋭いものとやや低いものがある。

高杯（脚付皿）（図13-90-95）脚部は低く、ハの字型にひらくものと、ひらいたの外に延びるものがある。体部は皿状で、深いものと浅いものがあり、杯身Aタイプ同様に口縁を強くナデて端部を外反させている。

鉢（図14-97・98）（97）は片口鉢で平坦な底部をもつ。見込み部は不整方向のナデ調整を施す。（98）底部は丸みをもつ、体部は欠損部分ですでに器壁が薄くなっていることから、盤状のものになる可能性がある。底部及び見込み部は不整方向のナデ調整。

陶硯（図14-99,100）（99）は径の小さい割に器壁が厚く、欠損部分付近で急に立ち上がるなどから円面硯の脚部と考えられる。（100）は1981年の窯跡確認の際に採集された円面硯の脚部で、長方形の透孔を穿つ。

5. 小 結

窯体の上半部のみという小範囲の調査ではあったが、瓦と須恵器が予想以上に出土し、成果を得られた。瓦については瓦当の出土をみなかったのが惜しまれるが、10数点の平瓦片が出土し、そのすべてが凸面縄目叩き調整であり他の支群で採集される格子叩きの瓦の出土をみなかった。須恵器は、杯身・杯蓋・高杯・鉢・甕・硯が出土した。杯身はA・A2・B・Cの4タイプがあり、特にAとBではその器形の差は著しく、Aタイプは古墳時代の杯蓋から身に転化したタイプで、Bはのちに高台が付き奈良時代へと続いていくタイプのものである。この2つのタイプの杯身は、胎土や色調等非常に類似しており、出土状況からも同時に焼かれていた可能性が高い。また、高杯は通常みられる杯部とは異なり口径の大きい皿状の杯部をもつ。同様のものはD区の採集品にみられるが、それらは口縁を強くナデない点で若干異なる。（図-10）このタイプの高杯は、岡遺跡で出土している他、山田窯とはほぼ同時期に操業されている須恵器窯跡群である大津市山ノ神遺跡等で出土している。

本調査のA1号窯は遺物の特徴から、それを陶邑等の編年にあてはめると、TK46型式。Ⅲ型式2段階。飛鳥Ⅲに比定でき、年代は7世紀の第Ⅲ四半期に求められる。山田窯跡群を便宜的にA～Dの4支群に分けたが、それぞれ少量ながら表面採集遺物があるので概観すると、B支群では少量の縄目叩き痕のある平・丸瓦片があり、C支群は丸山氏が発表されている資料がある。（図10-1～9）。1の杯蓋はそれとセットになるかえりのある身が今のところ確認されていないので、現段階では身と考えた方が妥当であろう。6の杯蓋は器高が低く口径が大きい、他の遺物はA-1号窯出土遺物と同様のものである。D支群の遺物は器高の低くやや口径の大きい杯蓋や、1点のみであるが高台の付く杯身がみられる。

また、C・D支群では格子叩きの瓦がみられる。これら4支群の遺物から、山田窯跡群の瓦・須恵器生産は現段階では7世紀後半代におさまると考えて大過ない。7世紀後半の時期は、栗太郡衙跡の岡遺跡第Ⅱ期で官衙の様相の現われてくる時期にあたる。岡遺跡Ⅱ期の遺物はⅠ期（6世紀末～中葉）に比べ出土量が倍以上に増加し、瓦や円面硯、皿状の杯部をもつ高杯の出土する時期である。そして岡遺跡の最も盛行するⅢ期（8世紀前半～中頃）には、山田窯から東南約3kmの辻越・谷出窯に生産の場を移し、山田窯の操業は終止を迎えるのであろう。

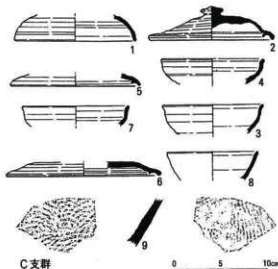
すでに近藤氏の研究にあるように山田窯は手原遺跡や蜂屋遺跡などの白鳳寺院、そして、岡遺跡の官衙造営に伴い成立した瓦陶兼窯と考えられる。

今回の調査は、従来表採遺物でしか知らなかった山田窯跡群の最初の調査であったが、調査範囲の限られたこともあって今までの研究を裏付けるのみに留

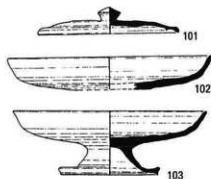
まった。今後周辺に残る窯跡の調査によってさらに新たな成果が得られることを期待したい。

注

- ① 小林圭介編『栗東の自然』 栗東町
- ② 大橋信弥・大崎隆志「手原遺跡発掘調査報告書―栗東町商工会館建設に伴う調査」（『栗東町文化調査報告書』第1冊 栗東町教育委員会 栗東町埋蔵文化財調査団）1981年
- ③ 西田弘「手原廃寺」（『近江の古代寺院』 近江の古代寺院刊行会）1989年
- ④ 『栗東の歴史』第1巻 古代・中世編 栗東町史編さん委員会 1988年
- ⑤ 『滋賀県史蹟名勝天然記念物概要』 滋賀県教育委員会 1936年
- ⑥ 丸山竜平「山田郷子鎮南古窯について」（『滋賀文化財だより』No16 滋賀県文化財保護協会）1978年
- ⑦ 近藤広「栗東の須恵器窯」（『栗東の文化』vol.11 制栗東町文化体育振興事業団）1987
- ⑧ 近藤広「金時周辺の古窯址群と岡遺跡」（『岡遺跡発掘調査報告書』1次・2次・3次調査 栗東町教育委員会 制栗東町文化体育振興事業団 1990年）
- ⑨ 須崎雪博「山ノ神遺跡発掘調査報告書」 大津市教育委員会 1991年
- ⑩ 田辺昭三「須恵器大成」 角川書店 1981
- ⑪ 中村浩「和泉陶器窯の研究―須恵器生産の基礎的考察」 柏書房1981年
- ⑫ 西弘海「飛鳥・藤原京発掘調査報告Ⅱ」 奈良国立文化財研究所 1978年
- ⑬ ⑤に同じ

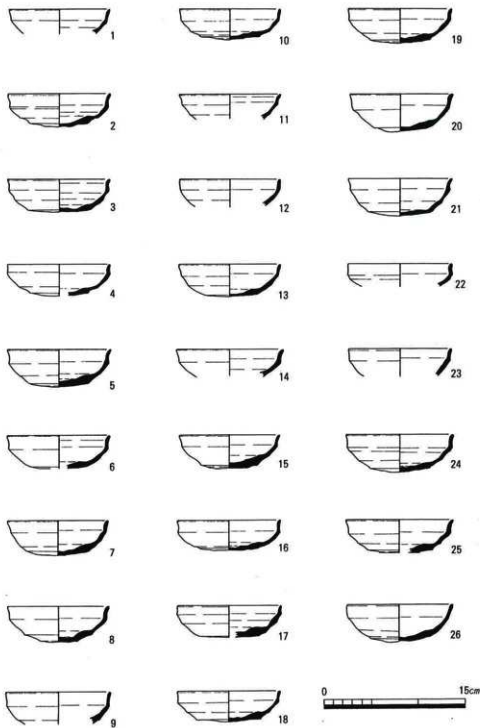


出土須恵器実測図

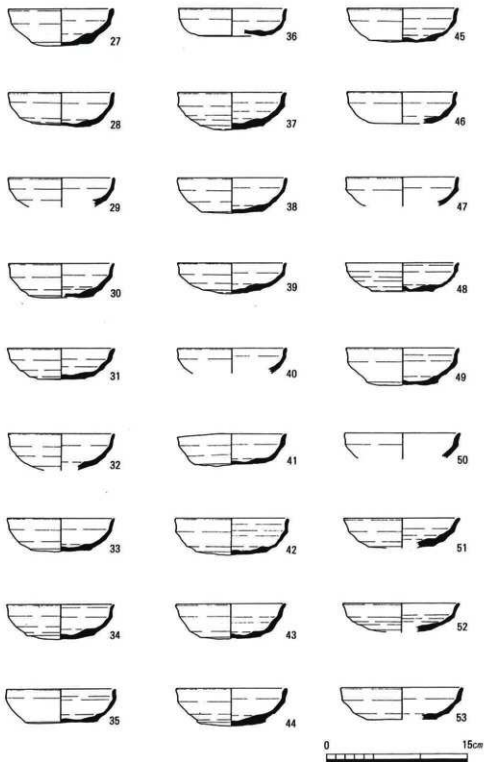


第10図 C・D支群採集遺物

杯身A型式



第11圖 出土遺物実測圖



第12図 出土遺物実測図

杯身A 2 型式



56



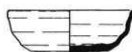
57



58



59



60



61

杯身C 型式

杯身B 型式



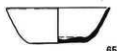
62



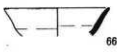
63



64



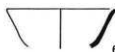
65



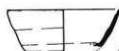
66



67



68



69



70



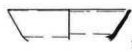
71



72



73



74



75



76



77



78

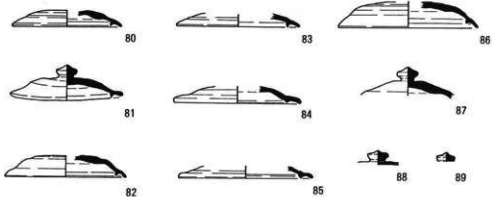


79

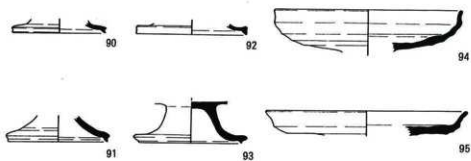


第13图 出土遺物実測図

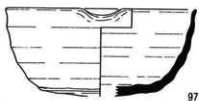
杯 蓋



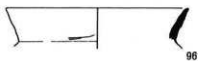
高 杯



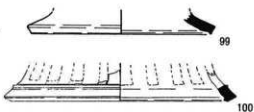
鉢



甕



陶 硯



第14圖 出土遺物実測図

須 惠 器 計 測 表

番号	法 量 (cm)		残 量	備 考
	口 径	器 高		
杯 身 A 型 式				
1	10.6	不明	口縁部 1/5	
2	10.8	3.5	口縁部 1/4欠	
3	10.8	3.5	1/4	
4	10.8	3.4	1/3	
5	10.8	4.0	口縁部 1/3欠	
6	10.8	3.5	1/4	
7	10.8	3.8	完 形	
8	10.8	3.7	口縁部 1/5欠	
9	10.8	不明	口縁部 1/4欠	
10	10.8	3.3	口縁部 1/4欠	
11	10.8	不明	口縁部 1/6	
12	10.8	不明	口縁部 1/4	
13	11.0	3.5	1/2	ひずみ大
14	11.0	不明	口縁部 1/4	
15	11.0	3.5	口縁部 1/4欠	
16	11.0	3.2	口縁部 1/3欠	
17	11.0	3.4	1/3	
18	11.0	3.3	口縁部 1/3欠	
19	11.0	3.6	3/4	
20	11.0	4.0	1/2	
21	11.0	4.0	1/2	
22	11.0	不明	口縁部 1/4	
23	11.0	不明	口縁部 2/3	
24	11.2	4.0	2/3	
25	11.2	3.5	1/2	
26	11.2	3.9	1/2	ひずみ大
27	11.2	3.8	2/3	
28	11.2	3.5	完 形	
29	11.2	不明	口縁部 1/7	
30	11.2	不明	口縁部 1/3	
31	11.4	3.4	2/3	
32	11.4	不明	口縁部 1/5	
33	11.4	3.5	口縁部 1/2	
34	11.4	3.7	口縁部 1/2	
35	11.4	3.5	口縁部 1/2欠	
36	11.4	不明	口縁部 1/4	

番号	法 量 (cm)		残 量	備 考
	口 径	器 高		
37	11.6	4.0	口縁部 1/2	
38	11.6	3.8	1/2	
39	11.6	3.2	口縁部 1/5	ひずみ大
40	11.6	不明	口縁部 1/5	
41	11.8	3.3	口縁部 1/3	
42	11.8	3.9	口縁部 1/2	
43	11.8	3.7	1/3	
44	11.8	4.0	完 形	
45	11.8	3.6	1/2	
46	11.8	3.4	口縁部 1/3	
47	11.8	不明	口縁部 1/4	
48	12.0	3.0	2/3	底部に粘土紐痕を残す。
49	12.0	3.8	3/4	
50	12.2	不明	口縁部 1/3	
51	12.2	不明	1/4	
52	12.4	不明	1/3	
53	12.8	3.4	1/4	
54	不明	不明	口縁部 1/2欠	ひずみのため実測不可能、写真のみ、杯蓋片付着
55	不明	不明	口縁部 1/2欠	ひずみのため実測不可能、写真のみ
杯 身 A2 型 式				
56	10.0	4.5	1/4	
57	10.8	3.8	1/2	
58	10.9	4.0	3/4	
59	12.9	2.3	1/5	
杯 身 C 型 式				
60	13.0	4.6	1/2	
61	13.8	4.3	1/2	
杯 身 B 型 式				
62	9.9	不明	1/6	
63	10.4	3.3	完 形	ひずみ大
64	11.0	4.2 3.8	2/3	ひずみ大
65	11.0	3.8	1/4	
66	11.2	不明	1/4	
67	11.6	3.8	2/3	
68	11.6	不明	1/4	
69	12.0	4.5	底部の2/3欠	
70	12.4	4.6	3/4	
71	12.6	5.2	口縁と底部の一部欠	
72	12.8	4.9	1/3	

番号	法 量 (cm)		残 量	備 考
	口 径	器 高		
73	12.8 (12.9)	4.4	3/4	
74	13.0	不明	口縁部 1/4	
75	13.0	不明	口縁部 1/2	
76	13.5	不明	1/5	
77	14.0	4.5	口縁部 1/3欠	ひずみ大
78	14.4	不明	口縁部 1/4	
79	15.0	不明	1/4	ひずみ大
杯 蓋				
80	11.6	不明	天井部 1/8	T-2 出土
81	12.0	3.7	完 形	ひずみ大
82	13.0	不明	1/2	
83	13.0	不明	口縁部 1/4	
84	13.5	不明	1/7	
85	14.3	不明	口縁部 1/6	
86	14.6	不明	口縁部 1/4	
87	不明	不明	天井部 1/3	T-4 出土
88	不明	不明	天井部 1/9	宝珠つまみに窯壁片付着
89	不明	不明	宝珠つまみのみ	
高 杯 (脚付皿)				
90	10.0	不明	底部 1/4	
91	11.0	不明	底部 2/3	
92	11.8	不明	脚底部 1/4	
93	12.0	不明	脚部 1/4	
94	19.6	不明	1/3	底部回転ヘラ削り
95	21.2	不明	1/6	
甕				
96	19.4	不明	口縁部 1/6	
鉢				
97	20.2	9.2	1/2	片口鉢
98	不明	不明	1/3	
陶 硯 (円面硯)				
99	20.0	不明	脚部 1/12	径は脚部径
100	24.6	不明	脚部 1/9	径は脚部径。1981年出土



調査地伐採前



調査地伐採後



南東側から見る
右後方は安養寺山



盛土除去後
保護シートの状況



窯体検出状況



調査地全景
手前のトレンチは
T-1・2・3



窯体内横方向断面



窯体内縦方向断面



T-4 南側断面



遺物出土状況（北から）



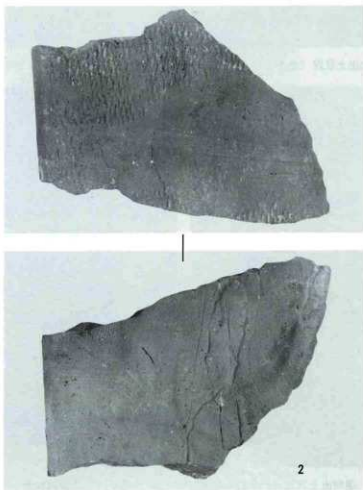
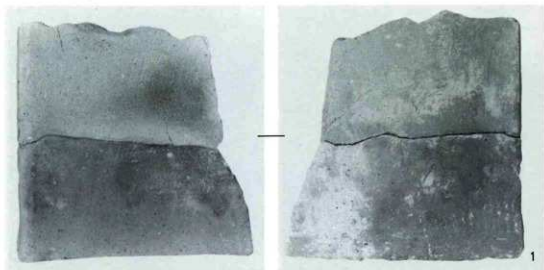
遺物出土状況（北から）

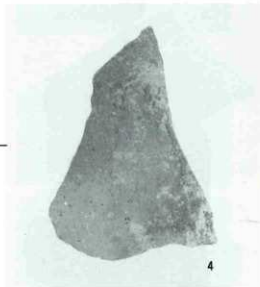
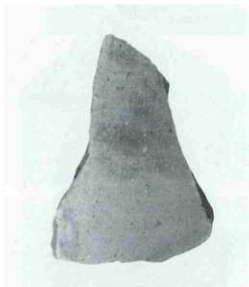
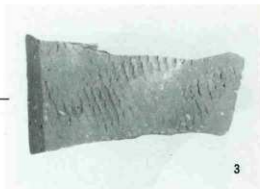


遺物出土状況

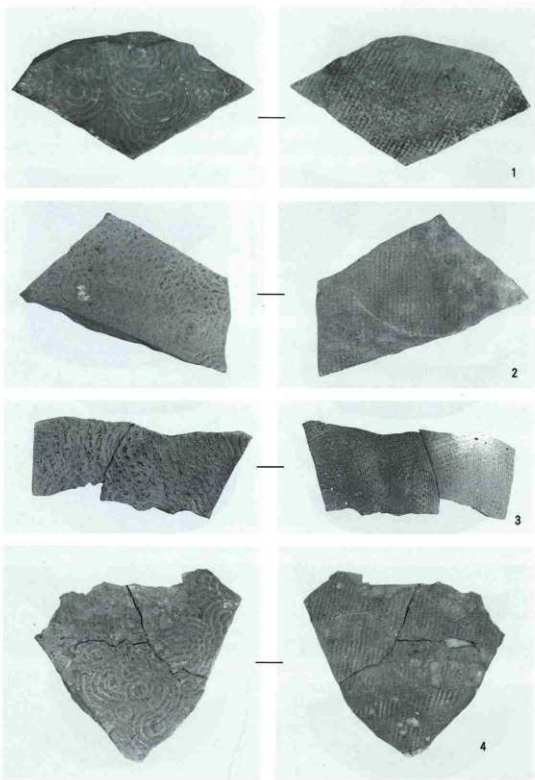


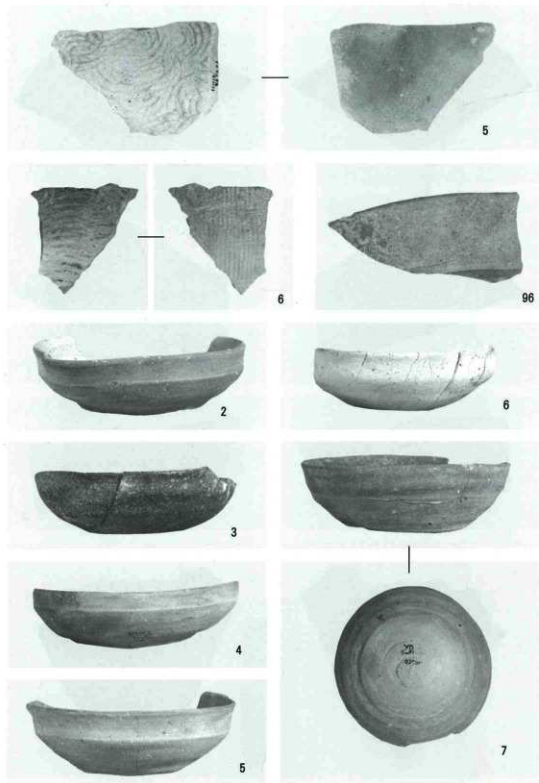
完掘状況









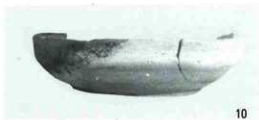




8



18



10



19



13



20



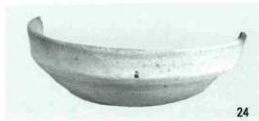
15



21



16



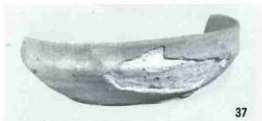
24



17



25







57



64



58



65



60



67



61



69



61



70



63



71



72



76



73



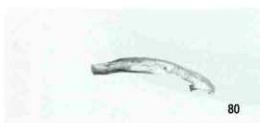
77



75



79



80



81



83

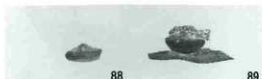


82



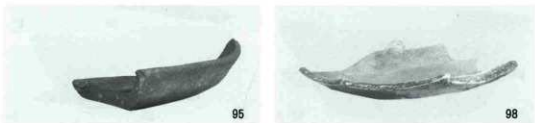
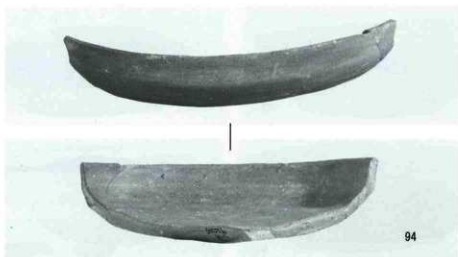
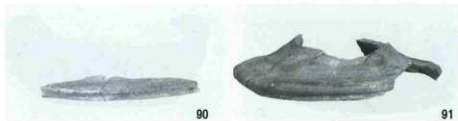
85

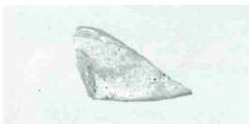
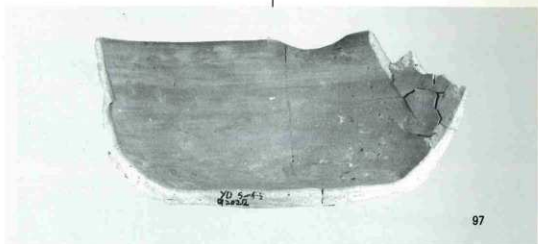
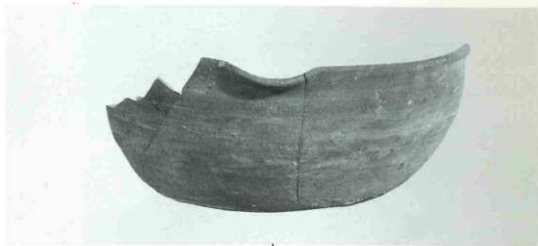
87



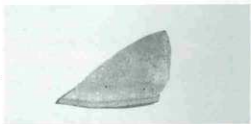
88

89

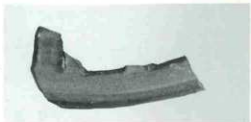


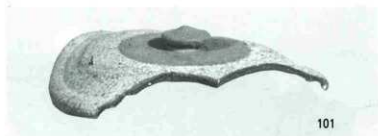


99

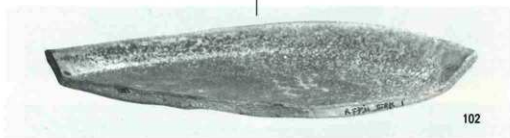


100





101



102



103

D 区 採 集 遺 物

栗東町埋蔵文化財調査 1992年度 年報Ⅱ

— 岩畑遺跡・狐塚古墳群・山田窯跡 —

発 行 日 平成6年3月31日

編集・発行 財栗東町文化体育振興事業団

滋賀県栗太郡栗東町川辺390-1

栗東町民体育館内

TEL. 0775-53-4321

印刷・製本 株式会社スマイ印刷工業

滋賀県栗太郡栗東町川辺568-2

TEL. 0775-52-1045内